

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第114号

|                           |                    |    |
|---------------------------|--------------------|----|
| 長岡京市鈴谷遺跡の発掘調査-----        | 古川 匠 ---           | 1  |
| 共同研究 室町時代の貿易陶磁-----       | 伊野近富・森島康雄・松尾史子 --- | 5  |
| 京都府出土の同安窯系青磁碗-----        | 小山雅人 ---           | 13 |
| 平成22年度発掘調査略報-----         |                    | 20 |
| 11. 鳥取橋遺跡第2次              | 12. 松山遺跡第4次        |    |
| 13. 塩谷南古墳群                | 14. 野条遺跡第17次       |    |
| 15. 加塚遺跡                  | 16. 長岡京跡右京第1006次調査 |    |
| 17. 柿谷古墳・美濃山遺跡            | 18. 女谷・荒坂横穴群第12次   |    |
| 19. 椿井遺跡第4次               |                    |    |
| 発掘余話第3回 遺物を考える1-----      |                    | 33 |
| 長岡京跡調査だより・110-----        |                    | 39 |
| 普及啓発事業-----               |                    | 41 |
| 「関西・考古学の日」関連事業を振り返って----- |                    | 43 |
| センターの動向-----              |                    | 44 |

2011年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 長岡京市<sup>すずたに</sup>鈴谷遺跡の発掘調査

古川 匠

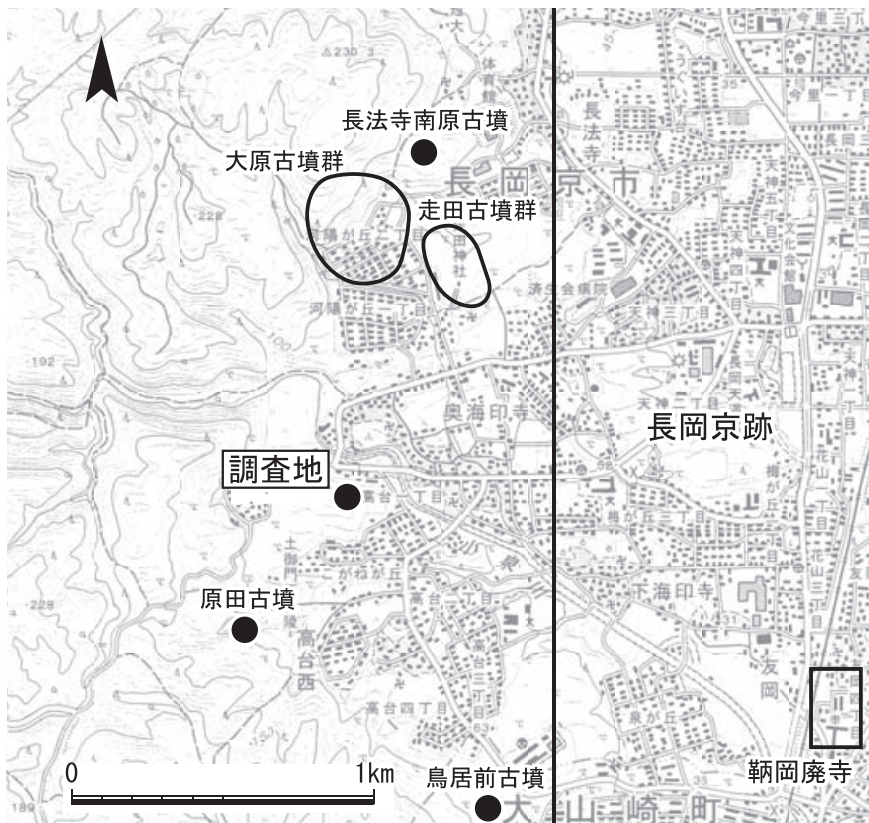
## 1. はじめに

鈴谷遺跡は長岡京市奥海印寺高山・鈴谷に所在する遺跡で、長岡京跡の西に位置し、古代の須恵器窯跡の存在が想定されている。今回の発掘調査は、京都第二外環状道路建設工事に先立って実施した。調査対象地では、平成21年度の発掘調査で古墳の石室が検出され、近接する地点で古墳時代前期の埴輪が出土している。この結果を受け、平成22年度の調査では、同地点の調査トレンチを拡張し、改めて発掘調査を実施することとなった。調査期間は平成22年6月1日～10月28日で、調査面積は2,500㎡である。

調査区は丘陵の斜面地に位置し、調査前の現況は竹林であった。平成21・22年度の当地区の調査では、トレンチを計5か所に設定し、うち1か所で古墳時代の遺構・遺物が数多く確認された。本稿ではこの調査区の概要を記述する。

## 2. 調査概要

調査区北寄りの地点で、小規模な横穴式石室 S X 01 を 1 基検出した。石室の規模は全長3.5m(玄



第1図 調査地点位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

室長2.0m、羨道長1.5m)、幅0.6mである。大きな石材が用いられず、玄室と羨道の幅が変わらない、無袖式である。玄室床面には小石が敷かれ、須恵器杯・蓋2セットと土師器甕が床面直上から出土した。鉄釘のような木棺に伴う遺物は確認されなかった。石室左側壁の玄門部にはやや大ぶりの石が配されており、石室と羨道部を区分しているようである。羨道は、内庭から玄門にかけて緩やかに傾斜・下降しており、玄門付近以外に側石は残存していない。羨道から玄門にかけて、閉塞石が5～8石検出されている。側石が床面付近に倒れている可能性もあるが、側石残存か所の床面にも石があることから、閉塞石と理解される。古墳時代以降の地形改変を受けたためか、S X01の墳丘規模・形態を示す遺構は発見されなかった。石室の規模からは、全長10m以下の小規模な古墳と推定される。S X01の近隣では他に古墳は検出されなかった。S X01の北側が後世の攪乱の影響を深く受けているため、S X01のみが造営されたのか、あるいは、周囲に造営された複数の古墳が後世に破壊されたのか、判然としない。

調査区の東部では、ピット・土坑がやや密に群集して確認された。この一帯では暗褐色の遺物包含層が堆積しているが、この層の上面で遺構が検出された。包含層中からは、古墳時代前期～後期の遺物が数多く出土している。包含層の土質はブロック質で遺構が判別し難く、検出できたピット・土坑以外にも多くの遺構が重複している可能性がある。出土遺物の大部分は、古墳時代後期の土師器・須恵器で、特に南よりの地点の大形土坑S K090とその周辺でまとまって出土した。供膳具のほかに、製塩土器・煮沸具が一定量含まれており、集落から出土する土器群のような組成を示している。S K090は竪穴式住居跡の可能性もあるが、柱穴や炉跡等の住居に付随する遺構が確認されておらず、性格は不明である。

昨年度の当地点の調査では、遺物の包含層から、家形埴輪の破片と性格不明の埴輪片が少量出



第2図 調査区位置図(S=1/2,000)



第3図 調査区平面図(S=1/500)

土した。小破片ではあるが、焼成や調整が丁寧で、前期の埴輪である可能性が高い。今年度も、調査区西部の斜面から埴輪円筒部の底部破片が出土したが、埴輪が樹立する古墳の所在は確認されなかった。現地形からは所在が特定できないが、より標高の高い地点に古墳が造営されていたようである。

古墳時代以降の遺物はほとんど出土しておらず、積極的な土地利用はなされていないようである。ただし、調査区東部のピットからは、長岡京期と考えられる土馬が1点出土した。当調査区より北西方向の、丘陵の中腹あたりでも同時期の土馬が表土から出土しており、京外の山麓部で土馬を伴う儀礼が行われたことを示している。

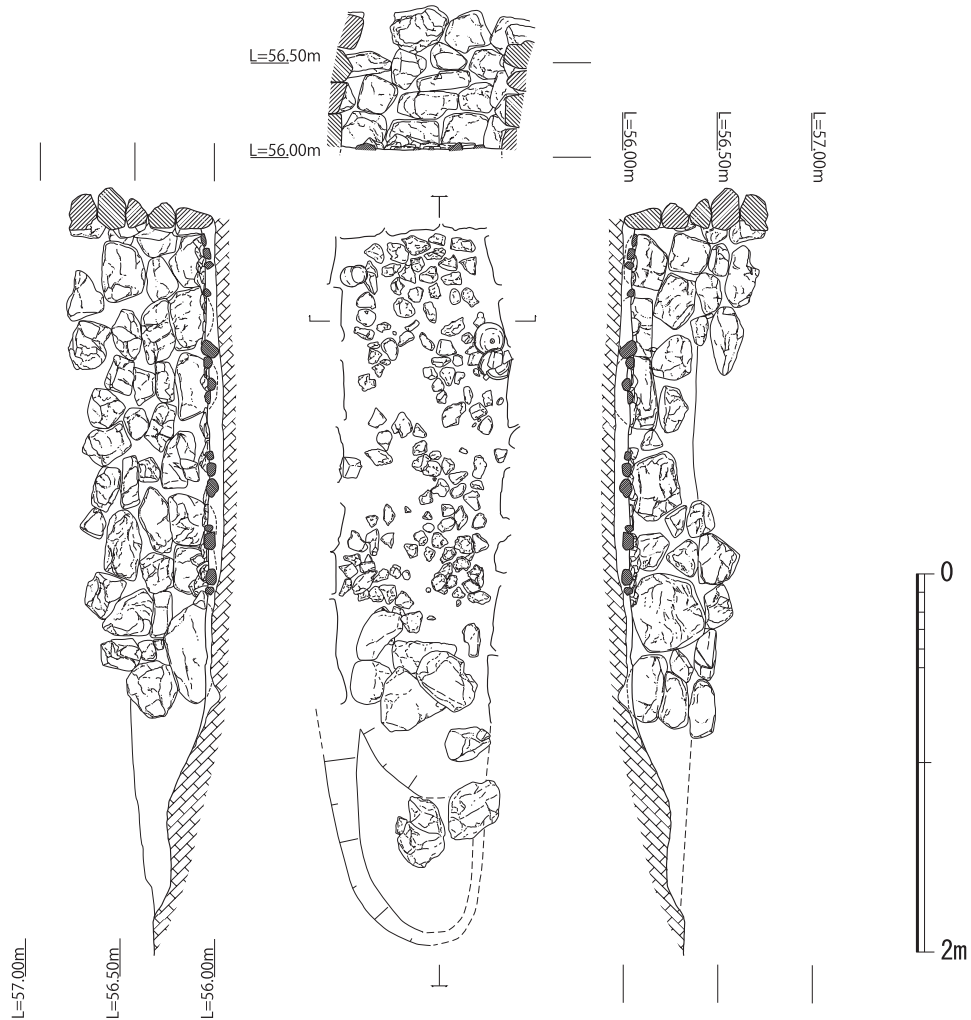
### 3. まとめ

横穴式石室 S X 01 は、石室と須恵器の形態から、7世紀中頃～後半頃と考えられる。乙訓地域で造られた古墳の中では、最も新しい時期の古墳となる。

調査区で数多く発見されたピット・土坑は性格が不明であるが、6世紀頃の生活を示す遺物がまとめて出土していることから、調査区とその周辺には集落が営まれていた可能性がある。ま

た、調査区付近に埴輪を伴う前期古墳の存在が判明した。これまでに所在が確認されている前期古墳は、今回の調査地に最も近いものでも1km以上離れている。今回の調査で、この一帯における有力な前期古墳の存在がはじめて判明した。

(ふるかわ・たくみ=当調査研究センター調査第2課調査員)



第4図 横穴式石室 S X01実測図(S=1/40)



写真1 横穴式石室 S X01(南東から)

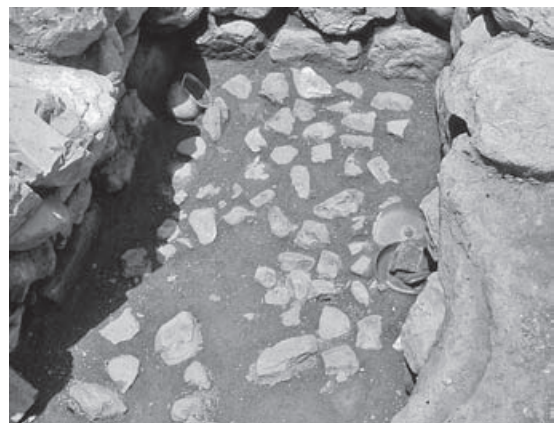


写真2 副葬品出土状況(南東から)

# 室町時代の貿易陶磁器

伊野近富・森島康雄・松尾史子

## 1. はじめに

本共同研究は、3か年計画で西日本における室町時代の貿易陶磁器の出土状況とそこにおける東南アジア系の陶磁器の様相、あわせて共伴する京都系土師器と在地の土師器について検討したものである。

1年目は大分県大友氏関係遺跡(豊後府内：中世大友府内町跡)、2年目は愛媛県村上水軍関係遺跡(能島城跡、見近島城跡)・湯築城跡、3年目は島根県尼子氏関係遺跡(史跡月山富田城跡・富田川河床遺跡)・沖手遺跡と大阪府堺環濠都市遺跡の資料を実見した。

本稿では、実見した各地域の様相を概観したあと東南アジア系の陶磁器の様相と共伴する京都系土師器について検討する。

## 2. 室町時代貿易陶磁器の出土状況

### 1) 各地域の様相

今回対象とした室町時代の貿易は、15世紀初頭(1404年)に足利義満が遣明船を派遣して日明貿易を開始するまでは私貿易である「南海交易」が主体であった。15世紀中頃の応仁の乱(1467)を契機に細川氏・大内氏が主導で日明貿易が行われるようになり、発着港は兵庫から堺に変更され、堺商人と博多商人が各大名の遣明船を請け負うようになる。そして16世紀初めの寧波の乱(1523)の後大内氏が滅亡する16世紀中頃まで大内氏と博多商人が日明貿易を独占し、その後、倭寇による密貿易やポルトガル船の来航を契機とする「南蛮貿易」が盛んになる。

a) 豊後：大友氏関係遺跡 豊後府内は戦国大名大友氏の拠点であり、対外交易により多くの交易品が出土している。大友氏は15世紀には公用荷物の運搬をしたり、遣明船の中の1隻を出して日明貿易に参画するなどしており、15世紀後半から16世紀中頃は室町幕府主導の勘合貿易の船舶の警固をするなど対外交渉に積極的にかかわっている。16世紀後半にはポルトガルやカンボジアと直接「南蛮貿易」を行っていた。貿易陶磁器は、この時期に出土量がもっとも多くなるが、その状況は天正14(1586)年の島津侵攻により府内町が焼失すると共に終焉を迎える。



第1図 関係遺跡位置図

中世大友府内町跡出土の貿易陶磁器の産地には中国、朝鮮、東南アジア(タイ・ベトナム・ミャンマー)などがあり、15世紀後半から普遍的にみられるようである。その初現期である15世紀後半から16世紀中頃には中国の青磁碗や景德鎮窯産の青花が少量出土するくらいで、16世紀中頃から末に青花が多量に出土するようになる。豊後府内の資料はこの時期のものが中心である。中国陶磁器には青磁や白磁、青花、華南三彩のほか黒釉・褐釉陶器がある。青花には漳州窯系が一定量含まれ、京都で出土するものより上質で、胎土は白色であった。ベトナム産白磁印花文碗の出土も見られる。他に挿鉢や鉢などの日常雑器である焼締陶器も一定量出土しており、外国人の居住域も想定されている。また、この段階には朝鮮王朝陶磁器が出土するようになる。東南アジア産の陶磁器は容器として輸入された壺類がほとんどである。タイ産がもっとも多く、ベトナムとミャンマーがそれに続く。ベトナム産長胴壺は、史跡名勝笠置山の調査で出土したものと同様の胎土であり、同資料がベトナム産のものである確証を得た。

また、土師器にはロクロ成形の在地特有の土器のほかロクロで成形する京都系土師器とされるものがある。基本的に分厚く、16世紀中頃から後葉に京都の土師器を模倣する傾向が強くなる。

**b) 中部瀬戸内：村上水軍関係遺跡** 中世後期の瀬戸内海の流通には、海賊が関与していたといわれている。そこで、芸予諸島に拠点を置く海賊村上水軍関係の遺跡である能島城・見近島城出土の資料と伊予の守護河野氏の居城である湯築城跡の資料を実見した。

能島城は能島村上水軍の本拠地で、貿易陶磁器には14世紀後半から16世紀末までの資料があり、15世紀後半から16世紀前葉のものももっとも多い。貿易陶磁器の種類には中国製陶磁器(青磁・白磁・青花)、朝鮮王朝陶磁器、ベトナム産陶磁器がある。朝鮮王朝陶磁器は雑器である小碗が中心である。15世紀後半ぐらいの京都の土師器皿を模倣した土師器皿が出土していたが、大内氏関係遺跡で出土するものと良く似ていた。見近島城では中国製陶磁器(青磁・白磁・青花・華南三彩・焼締陶器)、朝鮮王朝陶磁器、ベトナム産陶磁器が出土しているが、15世紀後半から16世紀中頃までのものが多い。同一器形・同一形態・同一紋様のものが数十個体、多種類出土していることから集落内消費ではなく流通を目的としたものであると考えられている。中国青磁の稜花皿は、京都で出土するものと比べると胎土が黒っぽく粗いものが多いようである。また、京都では出土しない見込みの部分が無釉であるものが見られた。他にも青磁の無文碗や波状碗、白磁皿で釉を口縁部のみ付けがけするものなど京都ではあまり見られないものが一定量出土している。京都系土師器皿はみられなかった。両遺跡での貿易陶磁器の出土状況は、九州北部の直接貿易に関与していた遺跡と共通性があることから北部九州から流通したと考えられる。文献資料によって村上水軍が瀬戸内航路の要衝を押さえていたことが明らかにされているが、貿易陶磁器の出土状況は、これを考古学的に証明するものといえる。

湯築城跡出土の貿易陶磁器には中国陶磁器、朝鮮王朝陶磁器、タイ製の壺がある。中国陶磁器は青磁・白磁・青花の碗皿類がほとんどで、青磁は龍泉窯系が多い。青花は景德鎮窯系のほか華南・漳州窯系のものがみられる。朝鮮王朝陶磁器はほとんどが褐釉瓶で、わずかに粉青沙器や灰青釉碗を含む。これらは15～16世紀の資料であるが、16世紀中頃以降には量が激減する。これは

見近島城での出土量の減少と連動しているようで、芸予諸島の流通は、博多と畿内を結ぶ東西流通の中継地点としての役割と共に沿岸の流通でも大きな役割を担っていたのである。この地域で畿内色がほとんど見受けられないことと他の広域流通品の出土状況からそれは北部九州と備前地方を結ぶ範囲の流通であったと想定されている。

c) 山陰：尼子氏関係遺跡 尼子氏は大永年間に因幡、石見、備後など11州の太守となり、権勢を誇った。しかし、永禄9(1566)年の毛利元就の1年半に及ぶ攻撃により、尼子義久は富田城をついに開城した。その後毛利氏が城を使用していたが、慶長5(1600)年に徳川方に敗れると、替わって堀尾吉晴が入城した。しかし、この地は出雲支配には向かないとして、慶長16(1611)年松江城の完成を待って、中心を松江城に移したことから、400年もの長き間、難攻不落を誇った名城もついにその使命を終えた。

島根県では日本海ルートで多量の中国製、朝鮮半島製の陶磁器が入っている。中国陶磁器には青磁・白磁・青花・焼締陶器などがある。尼子氏の家臣である新宮党の拠点富田城北麓の新宮谷出土の青磁は、龍泉窯の輪花皿が多く、花卉の境目にあたる位置に白釉で縦方向に筋を入れているのが特徴的であった。非常に質が良いもので、京都ではほとんど出土していないタイプである。富田城の城下町である富田川河床遺跡出土の白磁には、端反りの中小皿が多く、高台に銘が入るものが少量含まれる。高台が低く、釉が口縁部のみの付けがけの小皿が一定量見られた。これは、粗製で京都には入らないタイプである。同遺跡では、京都でも出土例が少ない中国製緑釉紅皿も出土している。朝鮮王朝陶磁器には白磁や粉青沙器、象嵌青磁、施釉陶器などが見られる。ベトナム産陶磁器も少量ながら出土する。出土の傾向は、県内どこでも出土するというものではなく、安来市や益田市に集中するようである。その背景としては、安来市の場合は、尼子氏の拠点であった富田城という政治の中心地があったこと、益田市の場合は、益田氏に関わる港湾施設があったことと深い関わりがある。朝鮮王朝陶磁器については、この地域の守護や国人が直接交易をしていたことによると考えられている。また、朝鮮半島製品が多量に出土すること、中国製品でも京都では出土しないタイプがあることから流通という観点からみると、貿易ルートが京都と相違している可能性と京都に運ばれる過程で物の取捨選択が行われていた可能性がうかがえる。また、京都系土師器皿については安来市広瀬町と益田市辺りでしか出土していないようである。

d) 堺環濠都市遺跡 14世紀から16世紀前半までの時期の一括資料と共伴する貿易陶磁器を実見した。貿易陶磁器の種類は、中国製の青磁・白磁・青花やタイの焼締陶器、ベトナムの白磁や焼締陶器、朝鮮半島製の陶磁器である。

中国製の陶磁器は、15世紀の資料を中心に実見したため、青磁や白磁が多く、青花は少なかった。青磁は印花文碗と稜花皿が主体で、他に盤や香炉がある。稜花皿は堺では15世紀第2四半期に多く出土するようである。精製品と粗製品の両方が出土していた。白磁は高台に抉りが入る皿B群が目についた。このタイプは、堺では15世紀の第3四半期に多く出土し、第4四半期にはなくなり、端反りの皿C群に変わるようである。青磁・白磁いずれも量・種類とも12・13世紀に比べると少ない傾向にある。



東南アジア産陶磁器では、タイの焼締壺が多く出土している。堺環濠都市遺跡では15世紀から出土している。ベトナム産陶磁器では皿のほか焼締陶器の長胴壺が多く出土している。皿については、内面に印花文を施す16世紀前半の白磁が古く、17世紀には鉄絵や染付が出土するようになる。特徴は見込みに残る三叉トチン痕である。壺は、現地には様々なサイズのものがあるが、特定のサイズのものが日本に來ているようである。産地としては、北部と中部のものがあり、新しい時期に北部の資料が増加する傾向にあるようである。タイ産も同様に時期によって生産地に違いがあり、当時の交易ルートを考える上で興味深い。朝鮮半島製の陶磁器については、焼締陶器壺が多く、碗・皿類はあまりみられなかった。時期的なものと考えられる。

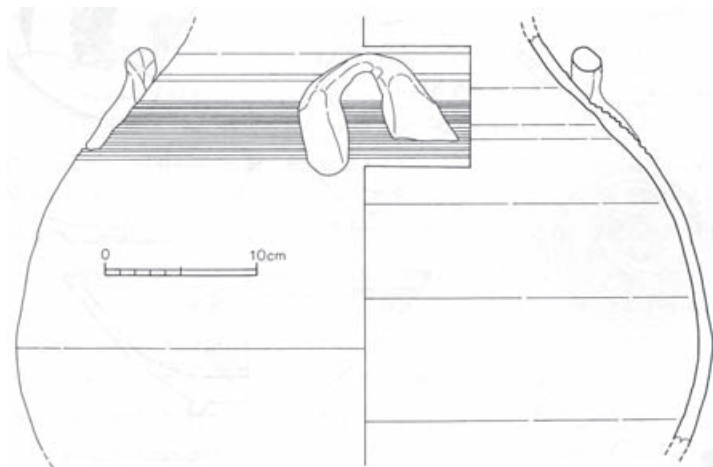
堺環濠都市の土器は、瓦質土器の羽釜によって編年されており、年代観については、京都系土師器等によってクロスチェックしていく必要がある。(松尾史子)

## 2) 東南アジア系陶磁器について

実見した東南アジア陶磁器はタイ産壺とベトナム産長胴壺のものがほとんどであった。タイ産壺は大型品で、タイ・ノイ川窯系で胎土はレンガ色で焼き締まっている。ベトナム産長胴壺の見分け方は、①形、②内外面ともレンガ色もしくは一面ロクロ目が顕著である、③胎土には縞状の黒い層がある、ということであった。外面の施文は2種類あり、肩部に簾縄文があるのが北部産、ないのが中部産である。

東南アジア陶磁器が多数出土するのは、貿易の中継地点であった沖縄県首里城跡をはじめとする沖縄県のグスク群の例を除くと、16世紀第4四半期に滅亡した大分県中世大友府内町跡と15～17世紀前半の大阪府堺環濠都市遺跡、16世紀末から17世紀第1四半期の大坂城跡および城下町、京都市中世京都の4か所である。主なものとしてはタイ産大型壺とベトナム産長胴壺で、いずれも何かを入れた容器として輸入されたものである。タイ産大型壺の中には硫黄が詰められていた例がある(堺環濠都市遺跡SKT202第3次生活面SK28)。しかし、日本は火山国であり、この例は硫黄を商売としていた屋敷での出土であり、タイから何を輸入したのかは不明である。

なお、東南アジア陶磁器の中には本来の使用方法ではなく、茶陶として使用されたことがわかる資料がある。ベトナム白磁碗・皿は当時日常食器として大量生産されたものだが、堺環濠都市

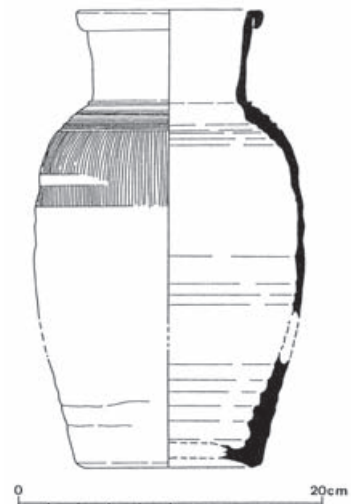


第2図 平安京タイ製焼締壺

遺跡SKT47地点SB09(博列建物跡)では茶壺、硯、香合、建水、すり鉢などと共伴しており、茶碗として使用されたことが推測できる。ベトナムミースエンフックテイク窯系土師質広口鉢は伝製品では「南蛮メ切糸目建水」と呼称されている。

京都出土の東南アジア陶磁器はそれほど多くない。京都市内出土

例については、1997年に能芝勉氏が31点の東南アジア陶磁器について紹介している。この内訳は、ベトナム産長胴壺は左京二条四坊出土(竹屋町)をはじめ13点、焼締広口鉢や印判染付椀1点などベトナム関係は19点となる。タイ産は青磁双耳壺1点などで合計5点である。出土遺構のほとんどは17世紀であるが、一部15世紀末から16世紀のものがある。左京内膳町S K82出土例は、糸割符商人松屋の屋敷内からで、豪商の持ち物であったことが知られる。基本的には外見上識別が容易なベトナム産長胴壺が多く、破片となった場合わかりにくいタイ産壺は少ない。おそらく、識別が進めばこの製品の出土量は増加すると考えられる。とすれば、実見した4遺跡のうち、大分県中世大友府内町跡と堺環濠都市遺跡の状況と同じである。これらの遺跡は貿易の拠点地域であり、消費する地点でもあった。京都が当時最大の消費地であったことは想像に難くない。同様の使用が行われた可能性がある。愛媛県湯築城跡、島根県富田川河床遺跡での出土例はそう多くなく、各地域の交易拠点ではあるが、貿易拠点ではない。すなわち、外国からの窓口と窓口から分配された地域拠点との違いを示している。



第3図 笠置寺ベトナム長胴壺

京都府内では伊野が笠置寺出土のベトナム陶磁を1例紹介しているだけで、ほとんど研究は進んでいないのが現状である。(伊野近富)

### 3) 京都系土師器皿と在地土師器皿について

京都系土師器皿とは、てづくねで製作された皿である。その特徴を述べると16世紀第3四半期後半から第4四半期前半は体部が直線的になり、とくに体部内面の上半に2度の膨らみがある。これは強く2度ヨコナデをした痕跡である。口縁端部は強くヨコナデして、端部内面は幅5mm程度の面が認められる。体部内面から口縁部にかけてのナデ上げは上から見ると「2」の字状である。内膳町S D170タイプを指標とする。この形式の1段階前が内膳町S D164タイプである。これも体部内面の上半に2度の膨らみがある。これは強く2度ヨコナデをした痕跡である。しかし、口縁端部内面は強くヨコナデはせず、面はもたない。最近の中井淳史氏の検討によれば内膳町S D164が第3四半期、内膳町S D170タイプが第4四半期とする(森島は1590年ごろとする)が、16世紀末までには終息している。16世紀末は口縁端部が分厚く、やや外開きになる。内膳町S K13タイプを指標とする。これらの色調は15世紀のものが乳白色、16世紀のものが淡褐色である。

在地土師器皿の多くはロクロ土師器と呼ばれるものである。

今回、実見した中では大分県中世大友府内町跡と島根県富田川河床遺跡が、京都系土師器皿が濃密に分布する地域となる。なお、山陰西部(石見)ではあるが島根県益田市もこの例に入るが、大内氏館跡の土師器皿の影響を受けたものもあることから、別系譜を想定しなければならないかもしれない。奈良や大坂は独自の製品を生産していたのである。ロクロ土師器皿を使用していたのは愛媛県湯築城跡である。では、具体的にみてみよう。

中井氏の研究成果を加味して説明すると、中世大友府内町遺跡では16世紀中葉に京都系土師器皿と在地土師器皿が出土するが、前者が多い。法量は9cm代、12cm代、14cm代の3法量で、在地土師器皿の法量とは重ならないという。豊後の他の地域では京都系土師器の出土はロクロ土師器より少なく、法量の1～2程度という。実見した府内町の土師器皿は分厚いものの、基本的には16世紀中～後葉のものは、京都を志向していると判断した。

次に、尼子氏関係の遺跡を見てみよう。富田城本丸出土の土師器皿はコンテナ1箱分あった。京都のかわらけを忠実にまねており、平安京左京内膳町報告S D164・S D170のタイプであり、実年代は16世紀第3四半期あるいは第4四半期前半までのものであろう。成形はてづくねで、調整はナデである。色調は淡褐色である。二の丸出土の土師器皿はコンテナ2箱分ある。京都のかわらけを忠実にまねており、平安京左京内膳町報告S K13・S K42のタイプであり、実年代は16世紀第4四半期から17世紀第1四半期のものであろう。口径は8cm、10cm、11cm、13cmなど各法量ある。新宮党関係の遺物には田畑から出土した備前壺と30枚の土師器皿がある。土師器皿は9cm程度とそれよりやや大きいものがある。詳細に観察すれば、平安京左京内膳町報告S D164・S D170の段階であるが、内膳町S D170タイプは直線的な体部であり、それに比べて口縁部はやや外反しており、やや古い傾向である。これに比べて、内面の中央部のなで部分は狭い範囲であり、新しい傾向である。したがって、16世紀末の資料である内膳町S K13よりは古く、内膳町S D164かS D170タイプとなり、1570年の前後20年に収まる資料となる。この地は新宮党のもうひとつの本拠地と考えられているところであり、とすれば1566年には廃絶しているのである。

堺環濠都市遺跡の土師器皿は特有のてづくね成形で、京都系のものではない。

以上のように、各地で土師器皿を見てきたが、京都産土師器皿を見慣れた者から各地の京都系土師器皿を見た場合、いくつかの問題点を認めることができる。第1は京都産なのか、京都系なのかという点である。これについては京都産と断定できるものはほとんどなかった。各遺跡に1点あるかないかという程度である。すなわち、各地で出土するのはほとんど京都産を模倣した京都系ということになる。では、てづくねならばすべて京都系なのかというとそうではない。堺環濠都市遺跡でみたように、別種のものがあるからである。

結局、京都産のなにを模倣したのかが重要になる。筆者らは、まずプロポーシヨンの相似を重視した。同時代のロクロ土師器は深手で杯として分類されるものがほとんどである。これに対して京都系土師器は浅手で皿タイプなのである。さらに体部の形状に注目した。15世紀から17世紀初頭にかけては、底部は小さく、体部が外半しているものから、底部が広く直線的なものに、そして、体部が短く、口縁部のみやや外開きのものへと変化するのである。つぎに口縁部の形状に注目した。16世紀から17世紀初頭にかけては、器厚が薄いものから徐々に厚いものへ、そして口縁端部を鋭くそろばん玉状にするということである。これらの特徴は、京都系と判断する際に重視したし、模倣の痕跡を認めることができた。

さて、第2に模倣かそうでないかということがある。豊後地域の京都系土師器皿を観察した中井氏によれば、16世紀前半ごろの京都産土師器の特徴を受容して、16世紀第2四半期前後に生産

が開始されたと推察される。しかし、成形技法やナデ調整、および器形との対応関係においては京都のそれを忠実に再現しておらず、技術が正確に受容されていない。16世紀末までの動向をみると、導入された技術のうち、とりわけ重視されたのは口縁部外面のヨコナデであったことがわかる。口縁部が外反するほど強くナデる例がきわめて多い一方で、京都産土師器の特徴ともいうべきナデ上げはあまり意識されていない。この理由は、体部外面下半に調整を加えず、口縁部のみナデる京都の整形手法はI群(ロクロ)土師器の製作技術伝統には本来ないものであり、だからこそ、重視されて強調されたと判断している。

なお、森島は山陰・九州・四国・北陸で16世紀末のてづくねの京都系土師器皿の口縁端部が外反というか外折するような傾向があることに注目している。これは、15世紀代の古い要素が残っているのかともみられるが、京都の土師器皿の口縁端部が肥厚して口縁端内面に幅5mm程度の面を持つ特徴を、口縁部を肥厚させるのではなく、外折させることによって表現しようとしたものであると考えている。益田市の三宅御土居遺跡や安来市の富田城跡などでは一見てづくねに見えるが、外面を観察すると回転台成形の痕跡が看取できる個体が出土している。同様の例は15世紀後半以降、京都産土師器皿を模倣する各地の土師器皿に見られる特徴で、中には底部に回転糸切り痕跡を残したのものもある。これも、使用時に見える部分を京都産の土師器皿に似せることを意識したものといえる。

ともあれ、体部上部を強調して模倣するということは、皿の使用方法に原因がある。すなわち、食べ物を盛る皿や酒器として使用した場合、使用者が見るのは口縁部である。また、使用直後は見込みを見ることになる。このような箇所を強調しているのである。なお、各地で見る土師器皿の器厚が厚いものが多い。これは、京都産を忠実に模倣する意識がなかったことを示している。

では、京都産土師器皿を模倣する意識とはいったい何なのだろう。中世京都が中世日本でもっとも模倣される存在であったことは万人が認めることだろう。それは、政治・経済・文化の総合力で他地域を圧倒していたからである。戦国大名は上洛することを希望していた。これは京都へ行けば政治力を行使できたからである。織田信長がはじめて上洛した時には御所を修造する為の資金を提供した。経済力を示したのである。文化については細川幽斎が有名である。有職故実に通じていたし、能や連歌の興行を多数おこなった。戦国大名の中には連歌に興じていた者が多いことが知られる。明智光秀もその一人である。これらの興行や各種儀式、また対面の場などに土師器皿は使用された。それは、宴席がつきものであったからである。その際、酒盃や盛皿として使用されたのである。

戦国大名を頂点とする武士にとって、宴席は他の武士と紐帯を結ぶ重要な出来事であった。各地域の中で、とくに京都系土師器皿を使用する地域はこの関係を重視していた可能性がある。しかし、それがすべてではない。たとえば、河野氏は京都から連歌師をよんでいるが、伊予は京都系土師器の世界ではない。したがって、今後は個々の事例を検討していかなければならない。

(伊野近富・森島康雄)

### 3. まとめ

今回の共同研究では、14世紀後半から17世紀の各地域の貿易拠点であった遺跡の資料を実見した。貿易陶磁器そのものについては、いずれの地域も14・15世紀の資料が相対的に少なく、龍泉窯系の青磁や中国製の白磁が主体である。16世紀になると中国製の青磁・白磁・青花に加え焼締陶器、朝鮮半島製の陶磁器やタイ・ベトナム製の陶磁器が出土するようになる。地域別に見てみると、山陰地方で朝鮮半島製の陶磁器が一定量出土し、拠点となる遺跡では小皿類が圧倒的に多い。この状況は博多と同様であり、宮津城、福井城、金沢城、七尾城など日本海沿岸の城跡で朝鮮半島産の小皿類の出土が認められる。京都で多く出土する白磁の出土量が少ないことと合わせて日本海側の特徴といえる。このことは、京都への流通経路とは別に日本海ルートで物が動いていることを裏付けるものといえよう。中部瀬戸内では、瀬戸内海における流通に芸予諸島の村上水軍が関与しているが、それは九州と畿内を結ぶ東西流通の中継地点としてであった。また、いずれの地域でも京都ではあまり出土しない粗製品が多く出土していた。一方貿易の窓口であった豊後府内では京都よりも上質なものが出土している。堺環濠都市には精・粗含めて多種多様なものが持ち込まれている。このような様相は、貿易の窓口港から中継地点を経て京都へ運ばれる過程で、物の取捨選択が行われたことを示唆するものと考えられる。

資料の年代観については、年代決定方法が地域によってそれぞれ違っている。今回の資料実見において共伴している京都系土師器皿とのクロスチェックによりさらに年代を絞り込み地域間の編年の齟齬をなくしていける可能性があるかと確信した。(松尾史子)

(いの・ちかとも=当調査研究センター調査第2課次席総括調査員)

(もりしま・やすお=京都府立山城郷土資料館主査)

(まつお・ふみこ=当調査研究センター調査第2課調査員)

#### 【参考文献】

鹿毛敏夫「十五・十六世紀大友氏の対外交渉」(『史学雑誌』112 財団法人史学会)2003

広島県立歴史博物館・中世土器研究会・大手前大学史学研究所『広島県立歴史博物館開館20周年記念公開シンポジウム 中世後期の流通を考える』2009

森村健一「15～17世紀における東南アジア陶磁器からみた陶磁の日本文化史」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集)2002

能芝 勉「京都市内出土の東南アジア陶磁について－柳馬場通竹屋町出土のベトナム陶磁を中心に－」(『研究紀要』第4号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所)1997

伊野近富「京都府出土のベトナム陶磁器」(『京都府埋蔵文化財情報』第104号 財団法人京都市埋蔵文化財調査研究センター)2007

中井淳史(『日本中世土師器の研究』中央公論美術出版)2011

# 京都府出土の同安窯系青磁碗

小山雅人

## 1. はじめに

平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけて列島各地から出土する同安窯系青磁碗は、同時期の龍泉窯系劃花文青磁碗に比べてやや少なく、また13世紀に入ると間もなく生産が終ってしまう。多くは福建省で生産された粗製の青磁碗であるが、300年後の侘び茶の祖珠光に見出され、「珠光茶碗」の名で千利休や織田信長に愛玩された稀有の唐物茶碗として知られている。

『山上宗二記』や各種茶会記で「珠光茶碗」と呼ばれた唐物茶碗を、現在茶道や古美術の世界では「珠光青磁碗」と呼びならわし、遺跡からも出土する細かい櫛描き文の同安窯系青磁碗Ⅰ類1b(第1図1~24)をこれに充てている。各地の資料館・美術館に展示されている伝世品(とされる)「珠光青磁碗」も殆どこのⅠ類である。伝世品として美術館に展示されている「珠光青磁碗」は、『山上宗二記』などの記述に合わない全くの別物であること、そして江戸時代の箱書きのあるものも含めて、いずれも近世・近代の発掘品であろうとしたのは西田宏<sup>(注1)</sup>子氏と稲垣正宏<sup>(注2)</sup>氏の論考である。

両氏の指摘を受けて、筆者は前稿で同安窯系青磁碗の各型式を再検討した際、『山上宗二記』に描写されている利休が所持していた珠光茶碗は、同じく同安窯系青磁碗と呼ばれてはいるが、ヘラの片刃彫りの放射文をもつ、さらに粗製のⅢ類1(第2図31・32)に分類される碗であろうと指摘した<sup>(注3)</sup>。

前稿では、分析の対象が博多遺跡群や大宰府を中心とする出土資料530点であったので、本稿では、京都府の出土資料を紹介してみたい。

## 2. 同安窯系青磁碗Ⅰ類1b

上述したように近世以降現代まで「珠光茶碗」「珠光青磁」とされてきている碗である。第1図の1~19と第2図の25~29に示した25点で、今回紹介する京都府出土例のおよそ4分の3を占めており、同安窯系青磁碗の代表的なものである。なお、16世紀の茶人には「せんかう(善好)茶碗」と呼ばれたものと稲垣正宏氏<sup>(注4)</sup>によって指摘されている。

厚めの底部から内湾して外上方に立ち上がる体部をそのまま収めて口縁とするが、口縁端部から1.5cmのあたりで内側に屈曲し、内面に沈線が見られることが多い。体部外面は細かい櫛目文(土師器などのハケ調整に似る)を縦方向に施す。内面は大きくS字状などに描いたヘラ描き文と櫛の先端で作った列点文をW字状に施したジグザグ文ないし電光文を数か所に施したのを見込み全体に一对配するのを原則としている。釉は内外面に掛けられるが、外面底部周辺は露胎のまま残す。釉の色調は様々で、オリーブの緑色から黄色味が濃くなった枇杷色のもの、あるいは青

灰色に近いものもある。また表面も光沢のあるガラス質から、磨りガラスないし塗料を塗った感じのものまで多様である。

第1図1～3は亀岡市の大堰川東岸、丹波国分寺の東に広がり、同寺との関係が深い蔵垣内遺跡第4次調査で出土したものである。1のオリブ色の釉は、濃淡ただらになっているが、ガラス質で光沢が強い。破片化していたが、完形近くまで接合できた資料である。2は、底部からわずかに残った口縁端部までの破片で、図面上完形品である。淡い黄緑色の釉が掛かる。胎土は、肌理の細かいクリーム色(淡褐色)の土で、器壁の薄い口縁部に近づくと灰色がかっていく。4～6は同じ亀岡市の大堰川西岸のおそらく丹波国府との関連で考えられる集落遺跡の遺物である。7は京都地下鉄烏丸線の調査で東本願寺前古墓(平安京七条三坊)から出土した完形品である。8～12はいずれも京都駅前での調査で出土した。8は新京都センタービル、12は関西電力ビルの北側での出土品である。9～11は現在の阪急ホテルの調査で多くの龍泉窯系青磁碗や同安窯系青磁皿と共に溝24から出土した。一方、13は上京区の二条家東辺にあたる同志社キャンパス遺跡から出土した。14以下は山城地域から出土したもので、14が長岡京市奥海印寺遺跡第3次、15が宇治市宇治市街遺跡、16～18は八幡市の木津川河床遺跡での表面採集品、19は相楽郡精華町棕ノ木遺跡の遺物である。

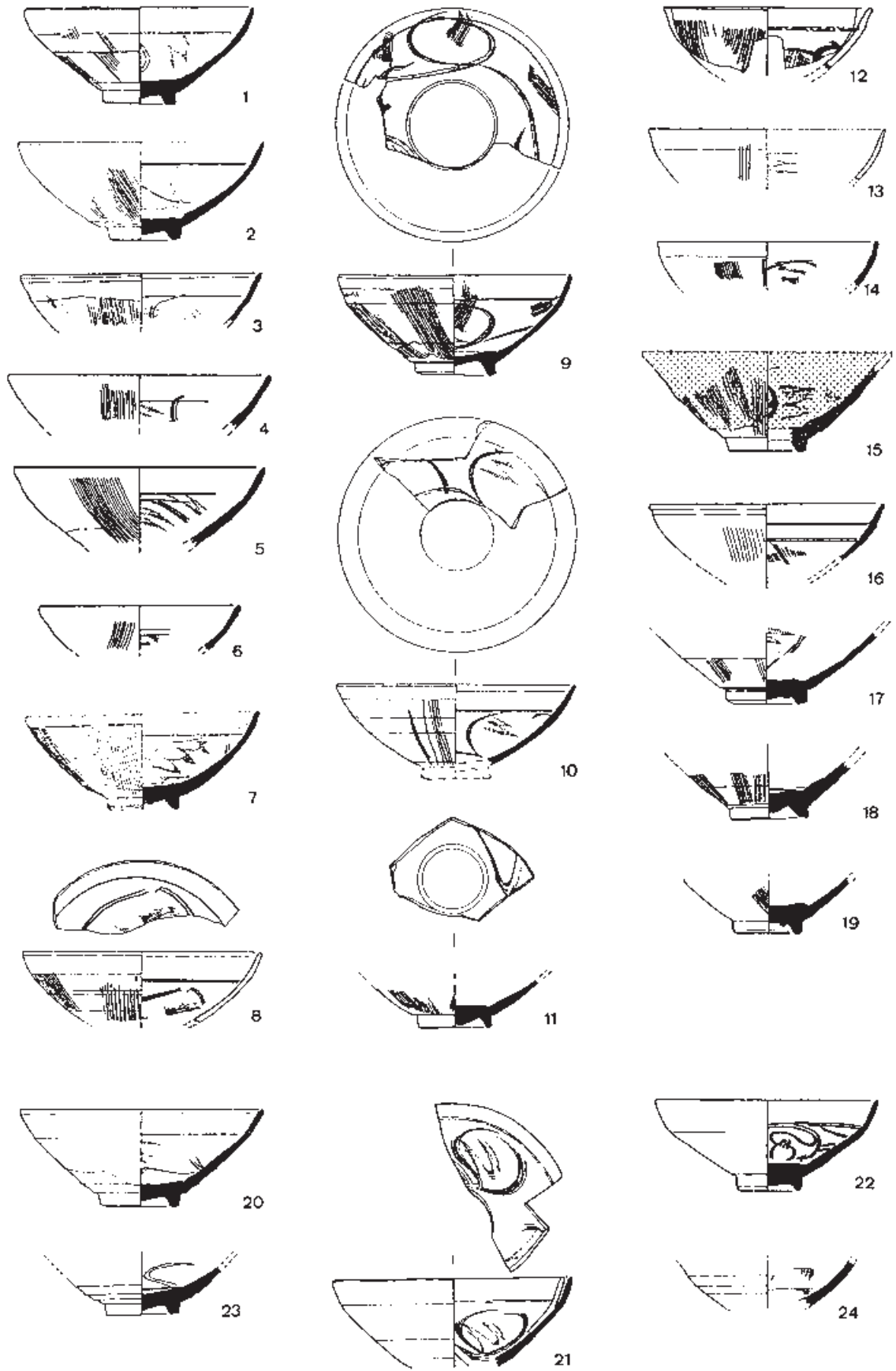
### 3. 同安窯系青磁碗 I 類 1a

上述の碗 I 類1bと同じ形態であるが、外面の櫛目文が見られず無文のものである(第1図20～24)。20は京丹後市丹後町の大山遺跡の径30cmの円形柱穴状の土坑から出土したもので、丹後での出土は珍しい。京都府ではこの種の墳墓の副葬品は龍泉窯系の青磁碗が圧倒的に多いが、30の内里八丁遺跡例と共に数少ない同安窯系青磁碗の例である。また、同じ大山遺跡では、祭祀用土坑から玉縁の白磁碗も出土している。21は京都市下京区の小学校敷地から白磁・青磁・緑釉・黄釉鉄絵など多くの輸入陶磁器と一緒に出土した。23は前出の木津川河床遺跡の表面採集品、24も前出の棕ノ木遺跡の出土品である。22は大宰府分類に従って、ここに置いたが、実は宇治市街遺跡の同一遺構から第2図30と一緒に出土したものである。両者の違いは外面の櫛描き文の有無だけで、同時期に編年される同一の形式に分類した方が良いと思われる。

以上の I 類1aについては、器形・施文・釉のいずれをとっても I 類1bと差異がない。

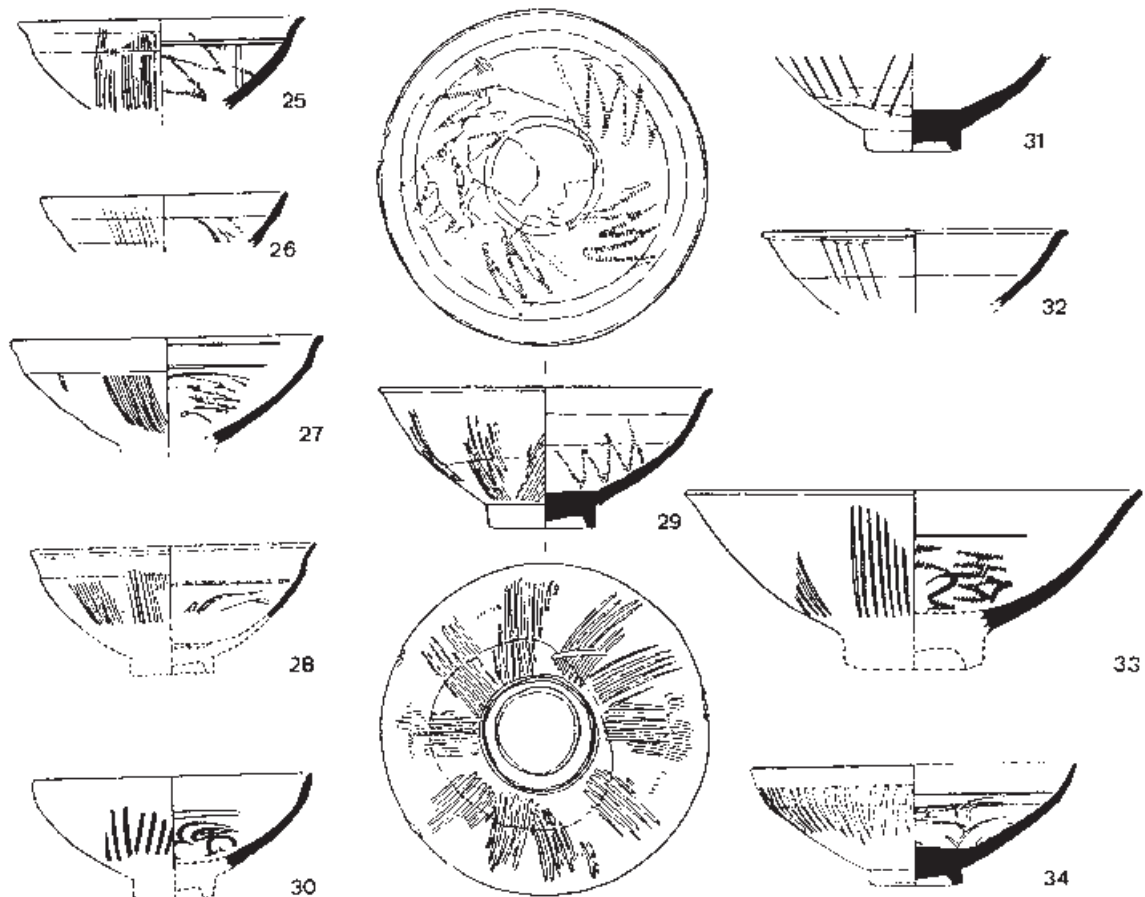
### 4. 口縁部が外反気味の I 類碗

第2図の25～29は、I 類の中でも少し特殊なものである。殆ど I 類1bと言ってよいのであるが、I 類の最大の特徴として内湾気味に立ち上がってきてそのまま垂直に収まるはずの口縁部が外反して終わる一群である。特に、25・27・28ははっきりと端部から1.5cm下の屈曲部から外反して、天目碗のような所謂すっぽん口になっている。この口縁は後述する III 類の特徴であるが、胎土・施文・釉調、どれをとっても I 類なのである。25・26が福知山市の平安末期～鎌倉時代の大内城跡、27が前出の亀岡市・千代川遺跡、28が長岡京市の井ノ内遺跡、29が上述の内里八丁遺跡の中



第1図 京都府出土の同安窯系青磁碗（1） 縮尺4分の1





第2図 京都府出土の同安窯系青磁碗（2） 縮尺4分の1

世墓のそれぞれ出土品である。29は、内面の文様がジグザグ文のみからなっている。類例は、博多遺跡などにもある。<sup>(注5)</sup>

### 5. 宇治市街遺跡土坑S K 51の青磁碗

平成14年度に宇治市街遺跡の発掘調査がJR宇治駅前で行われた。この調査で検出された土坑S K 51は極めて興味深い。渥美焼の甕に19個体分の青磁・白磁片が入っていたが、火災に遭った痕跡があり、また殆どの個体が半分以下にしか接合できないという。火災の後、割れた磁器片を集めて甕に入れて埋めたという状況であり、この12世紀の白磁と青磁19点は、確実に同時期に使用されていたと見做し得る、この上ない良好な一括資料である。そしてこの中に、従来(関西では)12世紀末～13世紀初と言いつわされてきた同安窯系青磁碗のより古式のもの認められるのである。

同安窯系青磁碗の最古型式は0類と呼ばれるグループで、出現期の龍泉窯系と区別できない。現状では同安窯と龍泉窯両系の共通の祖形のような扱いを受けている。11世紀末から12世紀初頭とされ、いくつかの形態が一括りにされている0類の内、内湾するタイプに初現的な劃花文が見られるのである。その一例が宇治市街遺跡の土坑S K 51にある(第2図33)。

口径23.7cmを測る大型品で、「0類と考えられる」と報告されている。外面の調整や内面上半部の文様帯が単線になっている点から、0類でもやや新しいと思われる。

0類に後続するのがI類1cである。大型品の0類に対し、I類1cは小型化する。I類1cの内面は0類段階からさほど崩れていない。外面の櫛描き文は粗い。土坑S K51出土の第2図30は、以上の外面の粗い櫛描き文、内面の具象的な劃花文、口径も約14.5cmで、小型化したI類1cの特徴をよく備えている。共伴した第1図22は、外面に櫛描き文がないのでI類1aに含めたが、内面の劃花文は30と同類で口径もほぼ等しい。

この遺構で注目されるのはI類1bも龍泉窯系の劃花文碗も見られないことである。博多遺跡群第121次調査で12世紀前半から中頃の土坑S K09からI類1cが出土しているが、この宇治市街遺跡の土坑51も、I類1cがむしろ0類の新しいタイプと共伴する極めて貴重な資料と評価できる。

## 6. 「同安窯系」青磁碗Ⅲ類

同じく同安窯系と呼ばれているが、かなり印象の異なる一群がある。Ⅲ類と分類されるかなり粗製の青磁である。前稿では山上宗二が言及している珠光茶碗をこのⅢ類1と推論した。京都府でもこの種の破片が出土している。

第2図31は、福知山市の大内城跡から出土した。土坑内で土師器皿・瓦器・白磁と共伴していた。釉は緑灰色で、胎土は灰白色である。体部外面にⅢ類の幅の広い櫛目文が施される。この特徴的な外面は、あえて言えば、浅い階段状、あるいは面違いのヘラケズリと言った感じである。さらに底部の荒っぽい調整(写真参照)は、Ⅲ類1として間違いない。



写真 大内城跡出土例 (31)

第2図32は、亀岡市蔵垣内遺跡の第1図34と同じ遺構から出土した。無文の内面、外面の幅広の放射文が先の31と共通しており、内面は無文である。釉はやや暗いオリーブ色で、透明度の高いガラス質である。口縁近くには無数の細かい貫入が見られる。外面調整と口縁の外反からⅢ類1と見たが、底部が残っていないので、決め手に欠ける。釉調の良さを見れば、0類に近い時期まで遡るのかも知れない。

## 7. 地下鉄烏丸線の青磁碗

平安京六条三坊十三町(京都市下京区烏丸通六条上る大阪町・北町)の土坑から1976年の年末に出土した資料である。報告には「中国産のものである。共伴遺物が少なく、年代推定がむずかしいが、平安時代後期後半の遺物であろう」とある。京都市考古資料館に展示してあるのを観察すると以下のとおりである。外面に幅広の縦線文、内面はヘラ状工具による花文で、櫛描きはない。

釉はガラス質で貫入が入り、色調は耀州窯製品に似た渋い深緑色である。実測図によれば、口径17.0cm、高さ6.4cm、高台径4.9cmを測る。以上の特徴から、この青磁碗を古い時期の同安窯系と推測する。

同安窯系青磁碗は、上述したように現段階では3ないし4期に編年できる。古期は0類で北宋末の11世紀末～12世紀前半、中期はI類1cで南宋初期の12世紀中頃、新期は同安窯系を代表するI類1bが充てられ12世紀後半～末に位置づけられる。また、終末期には、田中克子氏が言及している櫛描文を失った器高の低い13世紀に入る一群が相当するのであろう。<sup>(注6)</sup>烏丸線の青磁碗は、釉調は0類に近く、形態はI類1cに近似する。従って古期と中期の間に入ると思われるがいかかであろうか。

以上、京都府内で出土した同安窯系青磁碗を見てきた。見落としもあるかも知れないが、博多遺跡群などで見られる形式のヴァリエーションのかなりの部分が京都府でも出土していること、編年上、最古とまではいかないが、12世紀の前半頃までは遡りえることが確認できた。

(こやま・まさと=当調査研究センター調査第2課副主査)

注1 西田宏子「百碗の周辺」(『館蔵茶碗百撰』根津美術館)1989

注2 稲垣正宏「二つの珠光茶碗」(『関西近世考古学研究』II 関西近世考古学研究会)1992

注3 小山雅人「珠光茶碗の虚実」(『京都府埋蔵文化財論集』第6集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010

注4 稲垣上掲論文

注5 『箱崎6 福岡市文化財調査報告書』第551集 福岡市教育委員会 1998、第40図86

注6 田中克子「貿易陶磁器の推移・中国陶磁器」(『中世都市博多を掘る』海鳥社)2008、119頁

補注 第1～3図に引用した資料の出典：

1 黒坪一樹・松尾史子「蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群(Ⅱ)」(『京都府遺跡調査報告集』第134冊 (財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009 33頁、第38図38)

2 筒井崇史「蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群(Ⅰ)」(『京都府遺跡調査報告集』第129冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2008 181頁、第137図38)

3・32 筒井崇史・森島康雄「蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群(Ⅱ)」(『京都府遺跡調査報告集』第134冊 (財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009 第106図34(3)、32(31))

4～6・27 鶴島三壽「千代川遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第16冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)1992 92頁、図版第53 - 322(4)、323(5)、図版第52 - 273(6)、88頁、第48図162、図版123(27)

7 小森俊寛ほか『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅲ、本文編(京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981)129頁、第87図No.73 - 73、395頁；図版編、図版64 - No.73 - 73

8 川西宏幸『平安京左京八條三坊二町 平安京跡研究調査報告』第6輯 古代学協会 1983 60頁、第39図、図版29(39 - 3)

- 9～11 鈴木康司・永田信一ほか『平安京左京八条三坊 京都市埋蔵文化財調査報告』第6冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1982 9頁、図面19 - 288、写真33 - 288(9)、図面19 - 289、写真33(10)、図面18 - 278(11)
- 12 坂田孝彦・藤平寧『平安京左京八条三坊七町 京都文化博物館調査研究報告』第1集 (財)京都文化財団 1988 76頁、第131図22
- 13 鈴木重治『公家屋敷二条家東辺地点の調査—同志社同窓会館・幼稚園新築に伴う調査—』(同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.20 1988) 36頁、実測図版22 - 27
- 14 小田桐淳「奥海印寺遺跡第3次」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告』第20冊 財団法人長岡京市埋蔵文化財調査センター 1988) 33頁、第46図58
- 15 杉本宏「宇治市街遺跡」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第1集 宇治市教育委員会) 1982 65頁、第26図50
- 16～18・23 河上誓作・中世土器研究会「淀川・木津川河床の採集資料」(『中近世土器の基礎研究』Ⅸ 日本中世土器研究会) 1993 57頁、第18図37(16)・38(17)・40(18)・39(23)
- 19 森島康雄「椋ノ木遺跡平成9年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第85冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998 第56図450
- 20 平良泰久・常盤井智行・杉本宏ほか『丹後大山墳墓群 丹後町埋蔵文化財調査報告』第1集 1983 111頁、第95図252、図版第67
- 21 平尾政幸「平安京左京八条一坊」(『京都市埋蔵文化財調査概報』昭和61年度、財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1989 26頁、第3図16
- 22・30・33 杉本宏『宇治市街遺跡発掘調査報告書(宇治里尻5他)—JR宇治駅前市民交流プラザ建設に伴う発掘調査— 宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書』第55集 宇治市教育委員会 2004 23頁、図版12 - 312(22)・311(30)・310(33)
- 24 河野一隆「椋ノ木遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第105冊、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002 112頁、第85図188
- 25・26・31 伊野近富『大内城跡 京都府遺跡調査報告書』第3冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984 第16図2と図版第33(2)下段左(25)、第18図97(26)、第21図182と図版第35(1)下段左(32)
- 28 長谷川浩一「長岡京跡右京第27次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概要1980』第2冊 京都府教育委員会) 1980 316頁、第127図187
- 29 引原茂治「内里八丁遺跡第20次」(『京都府遺跡調査概報』第116冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005 71頁、第61図439、図版第47
- 34 大矢義明・永田信一『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅱ(京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981) 122頁、第63・64図

平成22年度発掘調査略報

とっとりばし  
11.鳥取橋遺跡第2次

所在地 京丹後市弥栄町和田野

調査期間 平成22年11月17日～12月21日

調査面積 285㎡

はじめに 鳥取橋遺跡は、本流の竹野川に鳥取川・木橋川・奈具川が合流する地点を中心とした遺跡として知られている。今回、竹野川左岸の水田に一般国道482号道路(丹後弥栄道路)が計画されたことから調査を行った。この調査は、今年度の5月から7月に行った鳥取橋から北側の第1次調査に次ぐもので、鳥取橋より南側を対象に、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。

調査概要 鳥取橋から南側の調査対象地に、7か所のトレンチを設定した。1トレンチは鳥取橋南西の水田に、2～5トレンチは鳥取橋から250～350m南の水田に、6・7トレンチは鳥取橋から南370m、周囲より0.6m前後高くなった島状の畑地に設定した。

調査は各トレンチを重機によって地表から徐々に掘り下げ、その後、人力によって遺構・遺物の検出に努めた。

1トレンチでは耕作土の下に砂・粘質土が堆積していた。2～5トレンチでは、重層した耕作土面の下に南西方向から北東方向の砂などの堆積があり、その下に砂・小礫などが厚く堆積していた。これらのトレンチでは安定面が確認されず、出土遺物も少量で小片であった。これらの調査成果からみて、竹野川と鳥取川・木橋川が合流する鳥取橋周辺に遺構・遺物の広がりがあるもの



調査地位置図(国土地理院 1/50,000 網野・宮津)

のと考えられる。6・7トレンチでは耕作土面の下に砂質土・砂が堆積し、その下から暗灰色粘質土を検出したが、この面では遺構を検出できなかった。暗灰色粘質土が周辺に広がり安定面を形成していたと考え、周囲から若干高い島畑状の場所にかつて生活面が存在していた可能性もある。

まとめ 調査の結果、各トレンチとも安定した地盤は検出されず、少量の遺物が出土したものの、遺構は検出できなかった。出土遺物は古墳時代以前のものはなく、中世以降のものがほとんどである。

(石尾政信)

## まつやま 12.松山遺跡第 4 次

所在地 京丹後市大宮町森本地内

調査期間 平成22年 5月25日～10月28日

調査面積 1,850㎡

はじめに 今回の調査は、府営経営体育成基盤整備事業森本地区に伴い、京都府丹後土地改良事務所の依頼を受けて実施した。松山遺跡は、竹野川左岸の低位段丘上に立地し、縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺物散布地である。事業地内において、同事業の施工により影響を受ける 4 か所に調査区を設定し調査を実施した。調査区は、南から A～D 地区とした。

調査概要 A・B 地区では、中央付近で溝 S D01 a・b を、南半部で土坑、柱穴等を検出した。

S D01 a は、東側丘陵から西側の竹野川に向かって流れ下る溝である。幅は約 5.0m～12.0m を測り、埋土には多量の礫を包含していた。東側の丘陵で発生した土石流の痕跡と考えられ、大量の礫に挟み込まれるように縄文時代から中世にかけての遺物が出土した。S D01 b も、東側丘陵から竹野川へ向かって流れ下る幅約 4.6m～9.7m を測る溝である。S D01 a と一部が重なり合っており、南側を S D01 a に切られていた。北岸は黒褐色シルトが堆積する緩やかな傾斜となっており、その層中には完形率の高い弥生時代後期後半の土器が埋没していた。

C 地区では、東西方向の溝 1 条、土坑、柱穴等を 50 基余り検出し、古墳時代から中世にかけての遺物が出土した。また、北端では東側丘陵の裾部を確認し、西に向かって傾斜する地形に堆積した遺物包含層を検出した。古墳時代前期から中期にかけての遺物が出土している。

D 地区では、上層遺構として鎌倉時代の火葬墓 S K01 を検出した。その下層は、ほ場整備事業施工による完成標高との関係から、遺物包含層の掘削が主な調査となった。古墳時代前期から中期を中心とする遺物が多量に出土した。

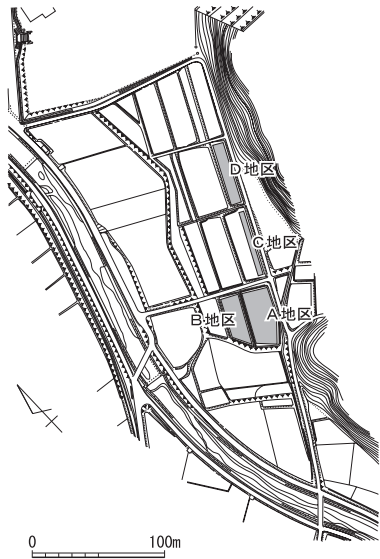
まとめ 今回の調査では、A・B 地区で弥生



第 1 図 調査地位置図  
(国土地理院 1/25,000 宮津・日置)



写真 調査地遠景(北から)



第2図 調査区配置図

時代後期の溝1条と古墳時代の土坑、土石流の痕跡等を、C・D地区では古墳時代の良好な遺物包含層や、中世の火葬墓を検出するなど、遺物散布地とされていた松山遺跡の性格を大きく変更する成果を得た。また、SD01bでは、弥生時代後期後半を中心とする良好な資料を得ることができ、当該期の集落が今回の調査地区の近隣に展開する可能性が極めて高まった。SD01aからは、焼け歪んだ須恵器が出土しており、近接地に未確認の須恵器窯の存在を窺い知ることができる貴重な成果である。D地区を中心にC地区の北端部にまで及ぶ遺物包含層は、古墳時代前期から中期にかけての時期を中心としており、小型丸底壺、ミニチュア土器、高杯等の器種が数量的に圧倒する。これらの遺物群は祭祀的な性格が色濃く、破損、摩滅等をさほど受けていないことから、隣接する東側の丘陵裾部に祭祀を執り行った場が存在するものと考えられる。(奈良康正)



第3図 A・B地区遺構配置図

しおたにみなみ  
13. 塩谷南古墳群

所在地 船井郡京丹波町曾根

調査期間 平成22年10月18日～平成23年1月20日

調査面積 850㎡

はじめに 塩谷南古墳群の発掘調査は、丹波綾部道路の建設に伴い実施した。塩谷南古墳群は、府立丹波自然運動公園を北に望む眺望のよい丘陵上に造られ、平成元年度の発掘調査で巫女形埴輪2体が出土した塩谷古墳群の南に隣接する。塩谷南古墳群の北側および東側の水田部には、横穴式石室をもつ深志野古墳群(8基)や宮之浦古墳群(11基)が点在し、長い時期幅で古墳が多く造られた地域といえる。

調査概要 調査の結果、古墳1基の内容が明らかとなった。墳形は円墳で、直径約15mを測る。古墳裾部から頂部までの高さは約2.5mである。また古墳の北と南の裾には、尾根から墳丘を切り離すように溝が設けられていた。幅広の南側の溝内から、須恵器甕の破片などが出土した。古墳頂部から、棺形態の異なる埋葬施設2基が見つかった。

第1埋葬施設 木棺を納めるために掘られた墓壇は、長さ3.7m、幅1.8mの長方形で、内部から長さ2.2m、幅0.65m、深さ0.3mの割竹形木棺の痕跡を確認した。棺の内側はベンガラが塗られ、鉄製のやじり1点が副葬されていた。

第2埋葬施設 墓壇はやや不整形な長方形で、長さ3.7m、幅1.6mを測る。西側にテラス状の段を設け、そこに須恵器壺1点とその周囲に有蓋高杯7点がまとめて置かれていた。これらの須恵器は、6世紀初頭(陶邑編年MT15併行期)とみられる。さらにこの墓壇の東寄り深く掘り込む長さ2.6m、幅0.55mの組合式木棺の痕跡が認められた。棺内には、長さ95cmの鉄製の剣と長さ15cmの鉄器(刀子か)などが副葬されていた。

まとめ 調査の結果、古墳の埋葬主体はタイプの異なる二つの木棺を納めた古墳時代後期(6世紀初頭)の円墳(直径約15m)であることが判明した。北側の塩谷古墳群(5世紀末から6世紀初頭)とほぼ同時期であり、塩谷古墳群とともに、当時のこの地域における有力者の墓であったと考えられる。

(黒坪一樹)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 園部)



## のじょう 14.野条遺跡第17次

所在地 南丹市八木町野条

調査期間 平成22年7月5日～12月3日

調査面積 1,950㎡

はじめに 今回の調査は、府営経営体育成基盤整備事業(川東地区)に先立ち実施した。野条遺跡では、平成10年に発掘調査が実施されて以来、過去16次にわたる調査が行われ、平安時代の建物跡群をはじめ、弥生時代から室町時代にかけての数多くの遺構が確認されている。

調査の概要 今回の調査では、弥生時代後期の溝群や奈良～平安時代の建物跡を検出した。

弥生時代の遺構としては、調査区の北西から南東にかけて、大小7条以上の溝群を確認した。最も規模の大きな溝SD1は、北西から南東へと掘られた溝で、幅4～5m、検出面での深さは約0.4mを測る。溝SD1の南辺は掘り直され、溝SD2が掘削され、この溝の西端で壺・甕・高杯など完形に近い土器がまとまって出土した。土器は溝と溝の間に掘り残された土手状の高まりに置かれ、溝SD2に転落したものであることが判明した。出土した土器から弥生時代後期後葉の溝と推定される。溝SD1の北側には、溝SD5・6・10・15などの中小規模の溝群が平行して掘られ、また溝SD5から南西に向けて掘削された溝SD14や、溝SD1から南東に派生する溝SD13を検出した。いずれも弥生時代後期後葉～末の溝群である。

調査地西部や南東部では、奈良～平安時代の掘立柱建物跡や柵列を検出した。掘立柱建物跡SB20は2間×3間の規模をもつもので、方形の掘形の柱穴群で構成されている。また掘立柱建物跡SB7は、3間×2間の総柱の建物跡で、北側に並行する柵列SA8を確認した。いずれも奈良～平安時代の建物跡や柵列と推定される。



第1図 調査地位置図  
(国土地理院 1/50,000 京都西北部)

まとめ 今回の調査で検出した弥生時代後期の溝SD1は、灌漑を目的に掘削された溝と推定される。過去の調査で確認された竪穴式住居跡は、溝の北側に展開することから、溝SD1は集落の南西の境界を画する溝であろう。また溝SD2から出土した土器は、出土状況から集落の境界で行われた祭祀に伴う土器とみられる。こうした調査成果から、これまで部分的に弥生時代後期の遺構が確認されていた野条遺跡は、弥生時代後期後葉～末に大きく発展した集落であることが判明した。奈良～平安時代の遺構としては、2基の建物跡群を検出した。北に

近接する室橋遺跡や野条遺跡の北部で、同時期の建物跡群や用水路とみられる溝群が確認されており、奈良～平安時代にかけての開発が、野条遺跡の南部にまで広がることが判明した。

(高野陽子)



写真1 調査地遠景(南東から)



写真2 調査地全景(東から)



第2図 調査地遺構配置図

## 15. 加塚遺跡

所在地 京都府亀岡市安町小屋場

調査期間 平成22年12月8日～平成23年1月18日

調査面積 300㎡

はじめに 加塚遺跡は、亀岡市街地西側にある西山の、北～北東にかけての広がりを持つ集落遺跡である。古墳時代や奈良時代の土器が分布することから、古代の集落があったと推測されている。今回の調査は、国道372号線の拡幅工事に伴うもので、工事範囲が加塚遺跡内にあたることから、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。

調査の概要 調査対象地内に東西方向に2本のトレンチを設定した。西側のトレンチを第1トレンチ、東側のトレンチを第2トレンチとした。

第1トレンチ まず、現代整地層を重機で剝がしたところ、旧水田層が認められたので、重機を用いて床土まで除去した。その後、人力で掘削した。表土下60cmほど掘削したところで、青灰色の良質の粘土が認められた。この粘土層は、黒ボク層より下位に認められる古い堆積層であり、遺構のベースとなる層である。この粘土層上面で精査を繰り返したが、現代の攪乱坑3基を検出しただけで、遺構・遺物を検出することはできなかった。

第2トレンチ 重機で約20cmの整地層を除去すると、青灰色粘土が現れたが、旧水田跡は認められなかった。この場所は、段丘のピークへと向かう地点にあたるので、水田は削平されて失われたと考えられる。青灰色粘土層は、第1トレンチ同様、黒ボク層より下位に認められる堆積層であり、遺構のベースとなる層である。遺構・遺物を検出することはできなかった。

まとめ 今回の調査では、現代の削平により遺構面が失われており、加塚遺跡に伴う遺構・遺



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 亀岡)

物を検出するには到らなかった。しかし、以下の点について新たな知見があった。

今回の調査地点は、地形が改変され、盛り土がなされているなどの見解があった。しかし、水田造成や宅地開発などの際に行われた整地作業により削平は受けているものの、旧地形が段丘縁辺部まで、ほぼ残っていることがわかった。したがって、西山と北に接する曾我谷川による開析谷までの間は、削平された部分を除けば、古代の遺構や遺物が遺存している可能性が高いと考えることができる。

(田代 弘)

ながおかきょうあとうきょう  
16.長岡京跡右京第1006次調査

所在地 長岡京市調子2丁目

調査期間 平成22年7月23日～11月10日

調査面積 660㎡

はじめに 今回の調査は、京都第二外環状道路の建設に先立ち実施した。調査地は、小泉川によって形成された扇状地上に所在し、長岡京跡の条坊復原では右京九条三坊二町に位置する。また、過去に実施した発掘調査では、調査地周辺部に弥生時代中期から中世にかけての集落跡が確認されている。今回は、前年度調査地b8-1地区とb8-2地区の間に位置するb8-3地区を調査した。

調査概要 b8-3地区では地表下約0.4m(海拔17.5m)付近で遺構面を検出した。調査区中央部から東にかけて、縄文時代から中世の柱穴・掘立柱建物跡・井戸・土坑・溝などの遺構を検出した。調査区西部では、自然流路跡を検出した。

縄文時代 調査区南東部で数か所のピットから、縄文土器とみられる土器片が出土した。また、定角式磨製石斧が出土したピットもある。

弥生時代 調査区西端で検出した自然流路跡には拳大の円礫を含む砂礫が厚く堆積し、東岸部の流路あとから弥生時代中期の土器・石器が出土した。また、自然流路の東側微高地上では、土器や石器を含む数基の土坑を検出した。

古墳時代 自然流路跡のうち、最も新しい砂礫層から古墳時代中期の土器が出土した。

中世 自然流路跡の東側微高地上には柱穴が多数存在し、1間×1間の小規模な掘立柱建物跡1棟と石組み井戸1基、耕作溝群を検出した。井戸内からは13世紀前半の土師器が出土している。

まとめ 今回の調査では、前年度に続き縄文時代から中世の集落関連遺構を検出した。縄文時代の遺構は、b8-3地区からb8-2地区へ北に広がる状況が確認された。北側に位置するb8-1地区と南側のb8-3地区で検出されていた自然流路は、調査地の西を流れる小泉川の旧流路とみられ、弥生時代中期に遡ることが明らかになった。この自然流路は中世以前には埋没していたとみられ、平坦地化した調査地周辺部には集落が形成されている。b8-3地区においても掘立柱建物跡や井戸・多数の柱穴を検出しており、当地の中世集落を考える上で大きな成果を得ることができた。



(竹原一彦) 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

## かきたに みのやま 17.柿谷古墳・美濃山遺跡

所在地 八幡市内里柿谷・美濃山

調査期間 平成22年7月26日～平成23年1月13日

調査面積 740㎡（柿谷古墳）

400㎡（美濃山遺跡）

はじめに 今回の発掘調査は、一般府道八幡インター線道路整備促進事業に伴って実施した。

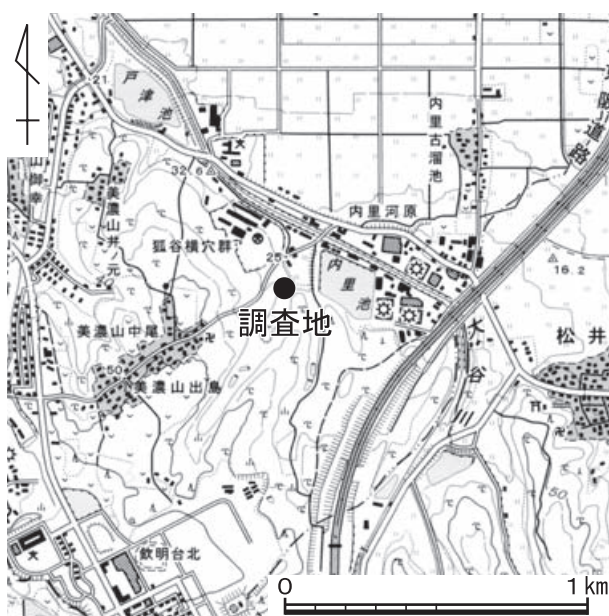
柿谷古墳は、八幡市の南側、京田辺市との境界近くの、木津川流域の平地を見渡せる丘陵の先端部に位置する。周辺には、近年の調査で前方後円墳であることが判明した美濃山大塚古墳や京都府下でも最大級の横穴群である女谷・荒坂横穴群、京都府指定史跡の狐谷横穴群などがある。

柿谷古墳は、弥生時代から奈良時代にかけての集落跡である美濃山遺跡の範囲内にある。今回、古墳の周辺部でも調査を行ない、その結果、古墳時代前期の土壙や平安時代の瓦片などが出土した溝などを検出した。

調査前の古墳の墳頂部には、室町時代後期頃以降のものと思われる石造五輪塔の水輪部や一石五輪塔の水・地輪部があり、下部に中世の墓壙などがあることも予想された。

調査概要 この古墳は、後世の開墾などで周囲を削り取られている。元の状態が比較的良く残っている西側では、墳丘の裾が直線的に延びており、一辺約12mの正方形の方墳と考えられる。墳頂部で木棺直葬の埋葬主体部を2基、墳丘東裾部から甕棺墓壙1基を検出した。

木棺直葬の埋葬主体部のうちの1基は、長さ4m、幅2mを測る。主軸は、ほぼ東西方向である。墳丘全体から見れば、やや北側寄りに位置する。この墓壙内に、長さ2.9m、幅1mの組合



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)

せ式木棺を設置していた。木棺の木口板を粘土塊で押え、棺内西側から、須恵器壺6点や高杯2点、鉄製馬具の轡、鉄地金銅張胡籥の一部や鉄鏃などが出土した。棺中央部付近では、人骨の一部が残存していた。棺東側木口付近からは、鉄剣1振、須恵器小壺2点、砥石2点等が出土した。また、棺西側木口外側で、須恵器高杯1点や杯蓋2点、杯身3点が出土しており、棺埋納後に置かれたものとみられる。この主体部から出土した須恵器は、陶邑編年のTK43型式期並行期のものとみられ、6世紀後半頃と考えられる。

もう 1 基の埋葬主体部は、墳丘全体のほぼ中央に位置する。先述の主体部の下で検出しており、先行する主体部と考えられる。墓壇の主軸は、ほぼ東西方向であり、長さ4.8m、幅 2 mを測る。墓壇内に、長さ2.8m、幅 1 mの組合せ式木棺を設置する。木棺の西側木口板を礫混じりの土で押える。棺内西側から須恵器壺 1 点が出土した。



写真 1 木棺直葬主体部(北から)

甕棺墓壇は、墳丘の東側裾部付近に設けられている。直径1.3mの土壇に、須恵器甕を埋納する。須恵器甕は、底部の破片がなく、人為的に打ち欠かれたものとみられる。このような状況から、甕棺として使用されたものと推測される。甕内部から、須恵器短頸壺 2 点、高杯 1 点が出土した。



写真 2 甕棺墓壇(東から)

墳丘の断ち割りをおこなったところ、古墳築造以前の旧表土と判断される土層の上面で、須恵器短頸壺 1 点と杯蓋・杯身各 1 点が据え置かれた状態で出土した。そのため、墳丘盛土を除去したところ、周溝を巡らせた一辺 6 mの小墳丘を検出した。埋葬主体部は無く、古墳築造に伴う祭祀遺構の可能性が考えられる。須恵器は、TK10型式期並行期のもので、6 世紀中頃のものと考えられる。柿谷古墳および初葬の主体部の築造時期を示すと考えられる。



写真 3 下層小墳丘(南東から)

まとめ 今回の調査で、古墳時代後期の 6 世紀中頃に築造された古墳であることが判明した。この古墳は木棺を直葬する方墳で、横穴式石室を採用していないという点でやや保守的な様相がみられる。ただ、鉄製馬具や鉄地金銅張胡籙などを副葬しており、当時のこの地域の有力者の墓と考えられる。

この古墳の周辺には古墳の分布が少ない。周辺地域は、横穴の密集地域であり、この古墳に追葬が行なわれた 6 世紀後半期には、女谷・荒坂横穴群で横穴の築造が始まる。この時期以降に築造された古墳は現状では確認されていない。このように考えると、柿谷古墳は、この地域で最後に造られた古墳とも考えられる。八幡地域における数少ない後期古墳の調査例であり、この地域の古墳時代を考える上で、重要な資料と言えよう。

なお、柿谷古墳の頂部には五輪塔が集められていたが、それに関する遺構・遺物は無かった。付近にあった石塔が、古墳上に集められて祭祀されていたものであろう。(引原茂治)

おんなだに あらさか  
18.女谷・荒坂横穴群第12次

所在地 八幡市美濃山荒坂65-2  
調査期間 平成22年5月13日～6月11日  
調査面積 400㎡

はじめに 今回の発掘調査は、新名神高速道路整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社(N E X C O西日本)関西支社京都工事事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、八幡市の南側、京田辺市との境界に近い丘陵地に位置し、付近には多くの横穴が分布しており、女谷・荒坂横穴群もその一つである。横穴は、丘陵斜面に横穴を掘り込んで造られた墓で、今回の調査地の東側では、52基の横穴が検出されている。これらの横穴は、古墳時代後期から飛鳥時代にかけて造られている。これまで、女谷地区ではA～Dの4か所の支群が確認されており、今回の調査地は女谷D支群と対面する位置にある。

第11次調査の成果により、谷の南東側斜面にも横穴が分布することが予想されたため、8基の横穴に対面する斜面に調査区を設定して調査を実施した。

調査概要 重機により表土を掘削し、その後人力掘削を進めたところ、横穴は確認できなかったが、谷の中央部で溝状の落ち込みの続きを確認した。この落ち込みは、幅1～2.5m、深さ30～50cmで、約22mにわたって検出した。埋土は礫を主体とし、西に向かって次第に浅くなる。埋土は上層が黄褐色系の土で、下層は黒褐色礫層である。直下で平安時代の布目瓦が出土した。表土から検出面まで近世以降の流土や現代の客土が堆積していた。

この谷内の溝状の落ち込みは、各横穴の墓道の端部を連ねる位置にあることと、少なくとも平安時代前期には露頭していたこと、それより下



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)

には20cm程度の堆積土しかなく、溝の底面が横穴掘削時の地表面と判断されることから、横穴掘削時～再利用時にかけての通路であったと判断される。同様の墓地内通路状の遺構は、女谷A～C支群においても確認されている。

まとめ 第11次調査で確認した横穴は、谷底付近から墓道を掘削しており、谷底を通路として使用していたものと考えられる。谷底の埋土から布目瓦片が出土しており、横穴の再利用された時期にも通路として利用されたと考えられる。

(松尾史子)

## つばい 19. 椿井遺跡第 4 次

所在地 木津川市山城町椿井御霊後  
 調査期間 平成22年 8月10日～11月21日  
 調査面積 1,050㎡

はじめに 今回の調査は、平成22年度府営基幹農道整備事業山城2期地区に係る埋蔵文化財発掘調査に伴い、京都府農林水産部の依頼を受けて実施したものである。

椿井遺跡は、木津川市山城町椿井に所在する縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。これまで3回の発掘調査が実施されており、今回の調査は第4次調査となる。過去の調査では、縄文時代後期の墓や弥生時代後期の竪穴式住居跡、土坑、飛鳥時代の溝・建物・柵列のほか中世以降のピットや土坑などが確認されている。

調査概要 今回の調査地は、椿井遺跡の南東隅に位置する。木津川の低位段丘上に立地しており、平地との標高差は約20mである。今回の調査では、集落の縁辺部の様子や隣接する椿井御霊山古墳の周溝の有無、寒光坊古墳群に連なる丘陵先端部における古墳の有無の確認を目的として調査を実施した。調査にあたっては、事業予定地内に5か所の調査区を設定した。

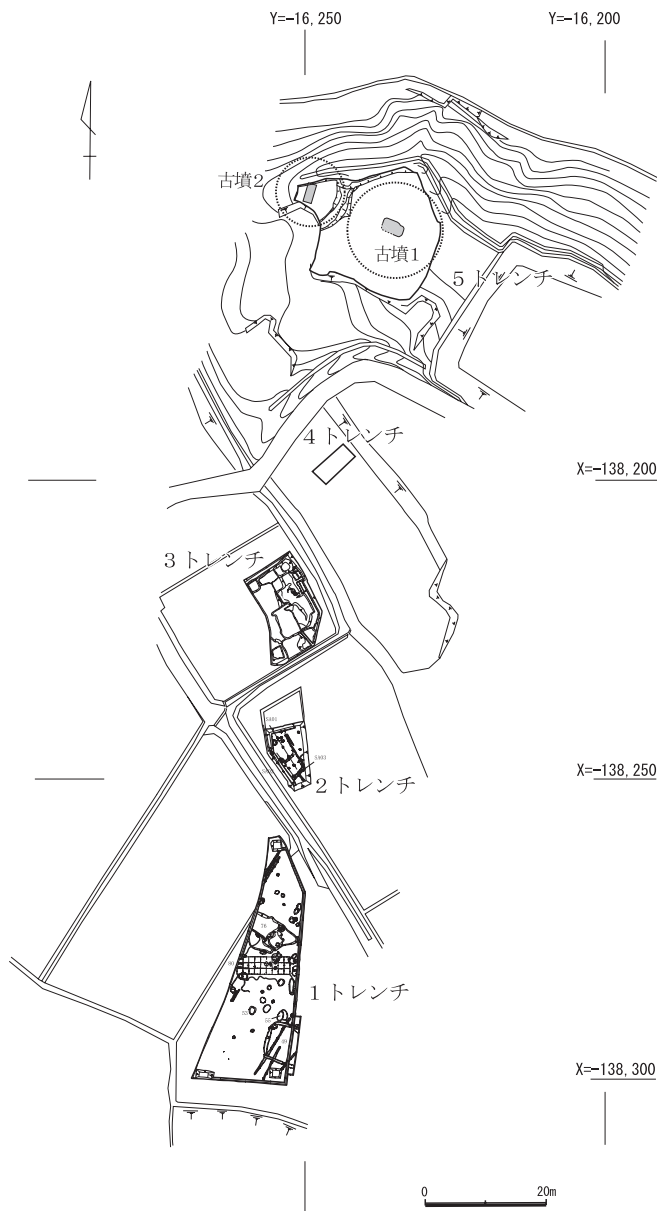
調査の結果、1トレンチでは弥生時代の方形周溝墓や土坑、流路を検出した。2トレンチでは中世の柵列と土坑を検出した。3トレンチでは近世以降の土取穴のほかには顕著な遺構・遺物はなかった。4トレンチでは顕著な遺構・遺物はなかった。5トレンチでは新たに古墳を2基確認した。このトレンチは、寒光坊古墳群が立地する丘陵の先端部に設定した調査区で、標高54～59mである。

上方に位置する古墳1は、わずかな地形の変化から直径16mの円墳と考えられる。埴輪や葺石は出土していない。埋葬施設は、北西に入口を設ける石室で、石材の抜き取り痕から羨道部と玄室との間に段差がある竪穴系横口式石室と考えられる。玄室は幅0.8m、長さ2.7mで、床面には親指大の礫が敷かれている。石材は花崗岩の切石である。ほとんど抜き取られており、基底部の奥壁と右側壁の一部が残存していた。石室からは、刀子1点、鉄鏃5点以上と碧玉製管玉が8点出土した。いずれも原位置を保っていない。また、石室埋土や石材抜き取り痕から須恵器杯身・杯蓋、土師器甕が出土した。



第1図 調査地位置図  
 (国土地理院 1/25,000 田辺)





第2図 トレンチ配置図(座標は日本測地系)

古墳2は、削平により墳丘の多くが失われているが、周溝の一部が残っており、直径13mの円墳に復元できる。周溝は幅2m、深さ0.6m以上で、溝の底で須恵器がまとまって出土した。埴輪や葺石は出土していない。埋葬施設は南西に開口する横穴式石室である。玄室は幅0.8m、長さ2.2m分を検出した。床面には子供の拳大の礫の隙間を埋めるように親指大の礫が敷かれている。墓壙および礫床の規模から古墳1の石室とほぼ同規模に復元できる。石材はすべて抜き取られていた。奥壁近くの床面で骨片がわずかに出土した。遺物は、石室埋土から出土した須恵器の甕片1点のみである。

まとめ 今回の調査では、新たに古墳2基の存在が明らかになった。古墳の築造時期は古墳1が6世紀前半、古墳2が6世紀初頭であると考えられる。同丘陵の尾根筋には他にも後期古墳が分布するものと考えられる。調査地の南東約500mにある前方後円墳である上狛天竺堂古墳では、5世紀後半に横穴式石室が導入されており、南山城地域

ではもっとも古い横穴式石室と考えられている。周辺古墳群でも横穴式石室が確認されており、この地域は、城陽市の久津川古墳群と異なり早くから新しい墓制である横穴式石室を積極的に採用した地域であると考えられている。特に古墳1の石室は、羨道部と玄室とに段差がある小型の竪穴系横口式石室と考えられ、南山城地域における導入期の横穴式石室の様相を考える上で貴重な資料といえる。

また、1トレンチでは流路および包含層から石器が十数点出土しており、1点ではあるが旧石器時代のナイフ形石器が含まれていた。南山城地域における旧石器の出土点数は少なく、木津川市内では本例で2例目である。縄文時代の石器についても遺構に伴うものではないが、付近に集落があったと考えられる。

(松尾史子)

## 遺物を考える 1

発掘余話第2回では、よくわからなかった遺構がさまざまな分野の専門家のご教示によってその性格が判明したことを紹介しました。今回は、今なお何のために作られたのか、どのように用いられたのか、よくわからない遺物を紹介します。

土器や木器にはいろいろな絵画が描かれたり、様々な模様や造形物が象<sup>かたど</sup>られたりしていますが、今の私たちがそれらを見て、これは鹿・サギ・亀などと判断していきます。しかし、何を象ったのかよく分からない資料も数多くあります。「何を描いたのか」をどう判断するかによって、その造形物を通して、当時の人が何を願い、何を思ったのかの解釈も変わってきます。

福知山市<sup>かんのんじ</sup>観音寺遺跡から出土した長楕円形の土製品は弥生時代中期の資料ですが、ヘラの先端をつかって細かな線刻が描かれています。蟬<sup>せみ</sup>のようにも見えますが、亀・鯉・龍などにも見えてきます。

土器や木器に獣や人を墨で描いた資料が奈良時代以降、数多く見られます。京丹後市大宮町<sup>おきた</sup>沖田遺跡のかわらけには牛や馬にも見える動物が描かれています。一つの解釈として、厄払いや雨乞いに関係した資料ではないか、と紹介されています。

京丹後市網野町俵野廃寺の軒丸瓦には、中央に蓮子、そのまわりに花卉を表現した蓮の文様が描かれています。その表現には複弁で八葉の花弁を描いたものと素弁の七葉の花弁を描いたものがあります。素弁七葉の軒丸瓦は稚拙なものですが、あえて6・8等分ではない7等分の花弁を描く必要があったことに、当時の人の何らかの「思い」があったようです。

土器には文様を描いたように見える資料もあります。相楽郡精華町<sup>もりがいと</sup>森垣外遺跡<sup>じょうせきもん</sup>の縄席文と呼ばれる<sup>わら</sup>藁を編んだ<sup>むしろ</sup>蓆のような文様をもった土器があります。この土器は朝鮮半島から持ち込まれたもので、文様として表面を飾っただけではなく、高温で焼成する際に失敗を避けるための「叩き締める」という必要性から文様がつけられたと考えられます。

また、手掛かりが無い遺物が出土することもあります。木津川市<sup>にしやま</sup>西山古墓では、墓の横に掘られた坑から鉄の板が2枚重なって見つかりました。鉄板に文字が記されていればはっきりしたこともわかるのですが、残念ながら文字は見つかりませんでした。墓誌もしくは神様に土地購入を示す<sup>ぼいちけん</sup>買地券とも考えられていますが、謎の鉄板として今も課題を残しています。

ひとつの遺物から、絵画・文様・形などを頼りに、どのように使われたのか、当時のひとびとがどのような思いでそれを作ったのかを考えることは、考古学の楽しい作業の一つです。その際に、過去の文献や現在の風習、その製作工程を手掛かりに、遺物を分析していきます。わからなかった遺物が、新たな発見によってわかることもあるでしょう。結論を急ぐことなく、いろいろな考えを出していくことも、考古学を深める上で必要かと思えます。(石井清司)

## これは、<sup>せみ</sup>蟬？（<sup>かんのんじ</sup>観音寺遺跡）

平成15年度に福知山市観音寺遺跡で行った調査で、弥生時代中期後半の竪穴式住居跡からへんてこな土製品が出土しました。この土製品、みればみるほど珍妙なものです。出土した直後から、なんだろうとさまざまな意見が出ました。蟬、亀、蛙、鯉、猪、などなど……。[自信はないけれど]という前置きで、蟬という意見がいちばん多くありました。

「蟬」は、長さ6.1cm、幅2.8cm、厚さ0.8cmの長楕円形で、重さは22.9gです。細かな線刻で両眼をはじめ、左右に振り分けられた<sup>はね</sup>翅、縦横の線で腹部が表現されているように見えます(写真)。

この土製品が蟬だとすると、頭に浮かぶのは古代中国における<sup>がんせん</sup>含蟬があります。古代の中国人は、死後の人体の腐敗を非常に恐れていました。そのため、王侯・貴族の間で、遺体を処置する際に身体の9つの穴に防腐や魔よけを願って、玉を入れることが流行しました。そのうち、丸彫りされた玉製の<sup>ぎょくせん</sup>蟬(玉蟬)を口に含ませたのが含蟬です。地面の下から出てきて成虫となる蟬は、復活の象徴と考えられていたようです。古代中国の玉蟬は多く見られ、それらの形状は蟬であることに疑いをはさむ余地のないほど写実的にかつ美しく作られています。それに対して、観音寺遺跡で出土した土製品は抽象的で、中国の玉蟬とは残念ながら似ても似つかないものです。この点から観音寺集落到住まう弥生人たちは、本物の玉蟬を見ていなかったと思われる。

実際、縄文時代以降、弥生時代、古墳時代を通じて、日本でも玉は呪術的なものとして祭祀や装身具、副葬品に広く用いられています。しかし玉を遺体に挿入する風習そのものが、古代の日本に入ってくることはありませんでした。もちろん、精巧な玉蟬の出土も今までのところありません。こういったことから、観音寺遺跡から出土した土製品が中国の玉蟬を真似したものとは考えられません。

線刻で描かれているという点から共通するものに、弥生土器の表面に描かれたさまざまな絵画があります。「絵画土器」といわれ、土製品が盛んに作られた弥生時代中期後半の時期には、出土例の7割以上が近畿地方に集中しています。描かれた絵画には人物、船、建物のほか、鹿、鳥、猪、竜などの動物は見られますが、蟬などの昆虫類については明確なものはありません。

頭をひねっても、何を<sup>かたど</sup>象って作ったのか、どうにもわからないところですが、現地調査をして



写真 観音寺遺跡出土の蟬形土製品

いる際に、観音寺遺跡の傍らを通る由良川の川面をながめて感じたことが一つあります。呼吸や食餌のため水紋を波立たせつつ浮き上がってくる亀、あるいは鯉などの動き、この土製品はそういったものを表現した弥生人の動態描写なのかもしれない、と。この考えにも全く「自信はないけれど・・・」が付きますが。

(黒坪一樹)

## 謎の墨画かわらけ（沖田遺跡）<sup>おきた</sup>

平成12年の初夏、京丹後市大宮町大字森本小字井内口の水田地帯で発掘調査が実施されました。沖田遺跡の第2次調査です。問題の墨画かわらけ(土師器皿)が、この調査で見つかりました。

かわらけは、口径8.1cm、高さ1.4cmを測ります。淡灰褐色を呈し、焼成は良好なものです。器形から鎌倉時代のもものと判断されました。動物は内面見込みに墨で描かれています(1)。一見して牛か馬に見えますが、後脚に比して前脚が矮小で、耳が大きく描かれており、何の動物か定かではありません。疑い始めると色んな動物に見えてきます。

かわらけに描いた動物の墨の絵はいくつか類例があります。沖田例に一番近いのは、一乗谷遺跡で普通の土師器皿とともに出土した「牛か馬か判然としない」とされたものです(2)。振り返った動物の絵は、かわらけでなく9世紀の緑釉陶器にも描かれています。下野国分寺の濃緑色の釉薬で描かれた例です(5)。この事例も「四足の動物」としか報告されていませんが、共通するポーズをとっており、「鹿」を連想させるものです。平安宮の内裏跡から「鹿」や「騎馬」が墨画された10世紀の土器も出土しています。<sup>さいぎゅう</sup>齋宮跡では鳥の例が見つっています。やや大きな土器には1羽の鳥、沖田と同じ大きさのかわらけには2羽の鳥が描かれています(3・4)。前者は奈良時代後期、後者は鎌倉時代のもです。

かわらけの墨書・墨画の例には、この他に、文字、人面(7)、宝珠、輪宝(6)などがあります。呪文や方角を書いた文字や輪宝文は地鎮用とされ、人面は厄払いの目的で地中に埋められたと考えられています。紙が貴重な時代ですので、文字は手習や筆慣らし、絵は下絵として土器に描かれたとも考えられますが、それにしては、精密に、失敗無く描かれています。そのため、墨書・墨画したかわらけは、多くの場合呪術的な用途をもっていたと考えることもできます。とすると、沖田遺跡例などの動物を描いたものは、土馬や絵馬と同様に殺牛殺馬の儀礼につながる厄払いや雨乞いと関係しているようにも考えられます。

「なぜ、土器に絵を描いたのか」の謎もこのように考えると一つの道筋が見えてきます。しかし、沖田遺跡の絵は牛でしょうか、馬でしょうか。皆さんには何に見えるでしょうか。(小山雅人)

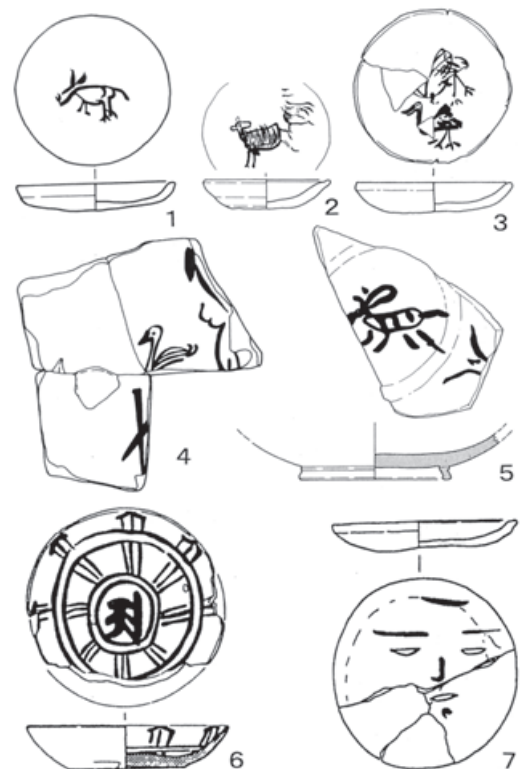


図 墨書かわらけ(縮尺4分の1)

1：沖田遺跡第2次(京都府センター概報99)、2：一乗谷遺跡第49次(福井県立一乗谷報告IX)、3・7：齋宮跡第114次(齋宮歴博報告I)、4：同第86次(齋宮歴博平成2年度概報)、5：下野国分寺跡第10次(栃木県報156)、6：屋敷前遺跡(いわき市報21)

## 七葉の蓮華で飾られた軒丸瓦（<sup>たわらの</sup>俵野廃寺）

俵野廃寺の発見は、大正11年に行われた俵野川流路変更工事によって、塔の心礎と思われる礎石と土器、複弁蓮華文軒丸瓦などが採取されたことによります。この発見によって、京丹後市網野町俵野の谷筋の丘陵裾部に、7世紀後半の古代寺院が存在していたことが明らかになりました。そのあと、俵野川護岸工事の際に、鬼瓦や重弧文軒平瓦などの遺物が発見されています。これまで発掘調査は行われていませんでしたが、平成18～20年度の俵野川地域防災対策事業に伴う調査で、平安時代になって寺の廃絶または倒壊後に廃棄されたと判断される堆積層から多くの瓦が出



写真1 俵野廃寺がある俵野の谷間

土しました。なかでも2種類の瓦の文様をもつ軒丸瓦は特徴的なものでした。

ひとつめの軒丸瓦は、これまでも採取されている複弁蓮華文のものです。瓦の文様は、複弁で八葉の花弁をもち、周縁に三本一組で交互に向きを変える変形した鋸歯文があります。文様は複雑ですが、花弁の綾線や調整などは雑に仕上げられています。この軒丸瓦は、川原寺系軒丸瓦の特徴をもっており、大和の影響を強く受けていたことがうかがえます。

もう一方の軒丸瓦は、文様がユニークです。文様は素弁の七葉の花弁ですが立体的ではなく、複弁蓮華文の軒丸瓦とは大きく異なります。円を七等分して花弁を配置するのは当時では難しく、それぞれの花弁は簡略化され、大きさ・形とも不揃いなものとなっています。明らかに複弁蓮華文のものとは別系統であることがわかります。

ふたつの軒丸瓦がどのように使用されていたかは現段階では不明です。また、不揃いな花弁をもつ軒丸瓦は近畿北部にも同系列のものではなく興味深いものです。どこで生産され供給していたのか、まったくの謎です。

このふたつの軒丸瓦が、寺院のどんな建物の屋根に葺かれていたかを皆さんも想像してみてください。（村田和弘）



写真2 川原寺系の八葉の複弁蓮華文をもつ軒丸瓦



写真3 七葉の単弁蓮華文をもつ軒丸瓦

## 土器の表面に<sup>むしろめ</sup>蓆目を確認（<sup>もりがいと</sup>森垣外遺跡）

精華町下粕に所在する森垣外遺跡の発掘調査では、土器の表面に縦方向の細かい縄目をもち、その縄目と直交するような幅0.2mmの沈線が施された土器片を見つけました。その後、破片を接合していきますと、<sup>わら</sup>藁で編んだ<sup>むしろ</sup>蓆のような文様をもつ甕であることがわかりました。また、蓆目と直交するかに見えた沈線は、土器を回転させながら<sup>らせんじょう</sup>螺旋状にめぐらせた装飾を目的とした沈線であることもわかりました。

この土器は、朝鮮半島の陶質土器のなかにあって特徴的な文様をもつことから<sup>じょうせきもん</sup>縄蓆文土器と呼ばれています。この縄蓆文は、高温で焼成する際に胎土のなかの気泡が破裂することを避けるため、気泡を叩き出す際に器表面に残った叩き目なのです。また、この土器は、5世紀前半に<sup>くだら かや</sup>百済か伽耶などの朝鮮半島南部で生産されました。

縄蓆文土器が出土した土坑は、6世紀前半に埋められていることから、100年近く、朝鮮半島や森垣外遺跡などで大切に使用されたこととなります。また、出土した土器は、焼き歪んで底部付近が平らに変形していますが、国内で出土する縄蓆文土器の多くも同じように変形している個体が多く見られます。個人的な見解ですが、底部に平底状の焼け歪みがあった方が、船内用の水甕としては安定するので、わざわざ歪んだ個体を意図的に選択したのではないのでしょうか。

4世紀後半から5世紀は、記紀でみられるように盛んに朝鮮半島との交流が行われ、陶質土器の出土が増加し、鉄や馬の生産が国内で定着する時代です。5世紀前半から6世紀前半の森垣外遺跡でも、それらに加え、大陸起源の建築様式である<sup>おおかべ</sup>大壁住居跡や携帯用の提げ砥石などが出土しています。出土した縄蓆文土器は、森垣外遺跡に技術をもった渡来人が参入したことを示す証なのです。

（小池 寛）



写真1 出土した縄蓆文土器



写真2 藁で編んだ蓆のような叩き目

## 鉄の板がでたぞ！（<sup>にしやま</sup>西山古墓）

それは、驚くほど現代的なサイズでした。書類サイズ(A4版用紙)とほぼ同形同大でした。

鉄板が出土したのは平成3年でした。相楽郡木津町(現木津川市)に所在する西山塚古墳の発掘調査を実施していた時、古墳の周囲にそれほど広くはない平坦面が認められました。古墳時代の住居跡などがないか、という目的で古墳の周囲を拡張して調査すると、直径50cmほどの坑が見つかりました。形や規模は何の変哲もない坑ですが、埋土が異様に赤かったのが印象的で、「何やら重要なものが埋まっているのでは」と直感しました。注意深く内部を掘っていくと、穴の掘形ぎりぎりに「鉄板」が水平に据え置かれていました。その鉄板が何であるのか、その場にいた誰も明確な考えを持っていませんでした。とりあえず、出土した時の記録を持ち帰ることにしました。結論を先に述べると、この鉄板は、この土坑のすぐ傍らで見つかった平安時代初期の貴族の墓(後に「西山古墓」と命名)に関連する遺物であることがわかりました。

出土した鉄板は、同形同大(長辺31×短辺21×厚さ0.3cm)の2枚の鉄の板が、正しく重ねられており、錆が進行して両者は密着していました。その鉄板について、当調査研究センターの調査会議で報告したところ、同席されていた都出比呂志理事(大阪大学名誉教授)から、「古代の墓誌ではないか」との指摘がありました。京都大学が過去に調査した京都市西野山古墓の出土品によく似たものがあるとのことでした。

調査が進展して、鉄板を見つけた土坑に隣接して木炭槨墓が見つかり、その構造が明らかになるにつれ、西野山古墓と墓壙の形状や規模、内部施設の構造などが驚くほど似ていることがわかってきました。西野山古墓では、内部から金装大刀や金銀平脱双鳳文鏡など、非常に豪華な副葬品が出土しており、それらは国宝に指定されています。坂上田村麻呂(贈従二位)の墓ではないかと考えられています。残念ながら、西山古墓からは漆紗冠(<sup>しつしゃかん</sup>五位以上の貴族が儀礼で着用する冠、粗い平織りの布=紗を獣皮革に貼り付けて漆掛けした組材を用いて作った)が出土しただけで、

「豪華な副葬品の出土」の夢は叶いませんでした。

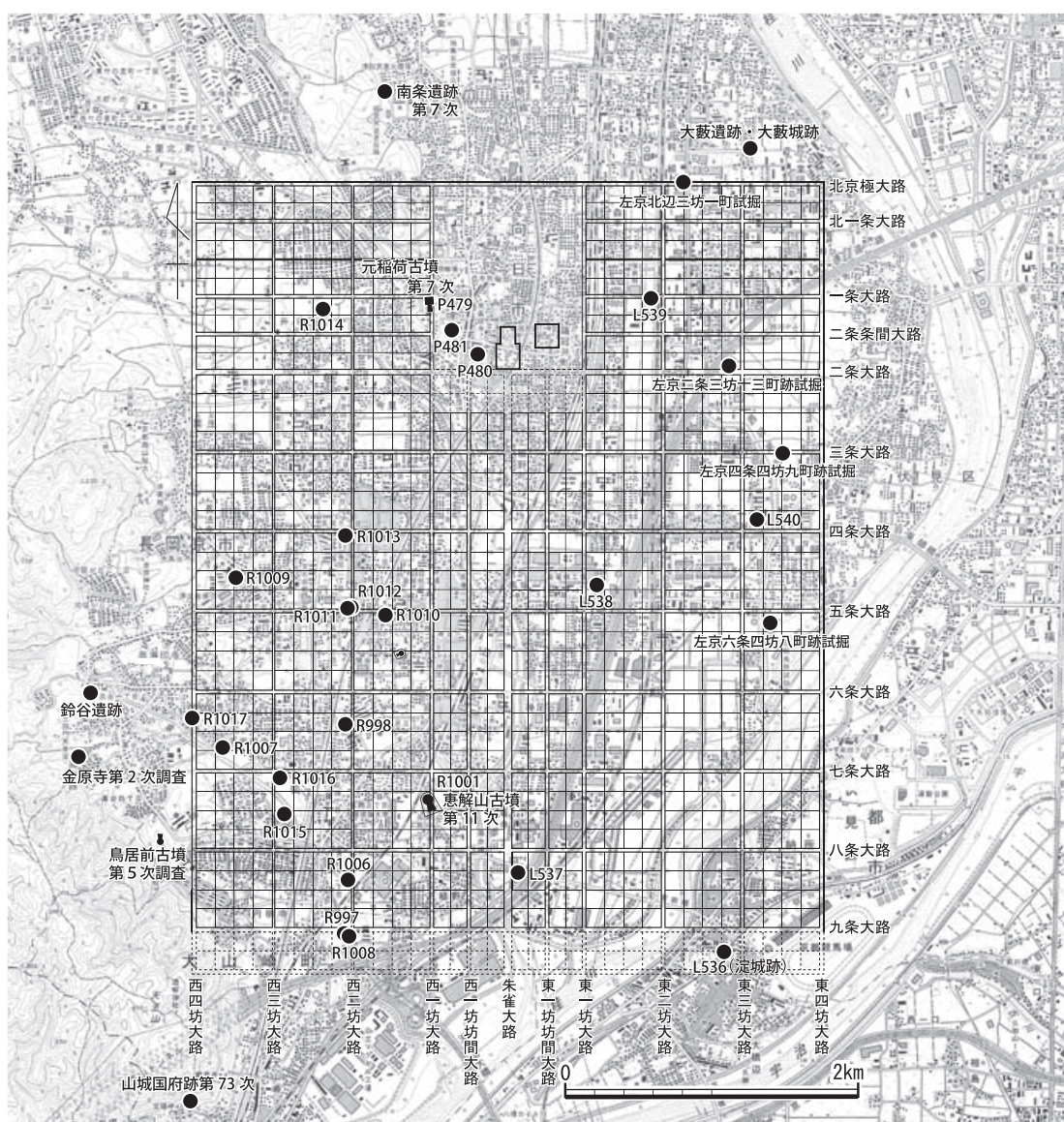


写真 鉄板

さて、西山古墓出土の鉄板は、表面の錆が進行しており、赤外線やX線写真での観察を試みたものの、刻書・墨書などの文字は確認できませんでした。ほぼ同じサイズの鉄板が、現在まで近畿を中心に6例ばかり知られています。しかし、その性格についてはよくわかりません。素材が鉄であるため、錆付いて、表面に文字が記されていたとしても、確認できないからです。墓に伴うことから、被葬者の名前を記した墓誌や土地の神様から墓地を購入する際の契約書(<sup>ぼいちけん</sup>買地券)との説がありますが、よくわかりません。はたして、この鉄板は何の目的で作られ、墓に埋納されたのでしょうか。(伊賀高弘)

長岡京跡発掘調査の情報交換及び資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成22年10月から平成23年1月の例会では、宮域3件、左京域5件、右京域15件、京域外7件、あわせて30件の調査報告があった。そのなかで、主要な事例について報告する。

**宮域** 宮跡第479次調査(向日市向日町)は、乙訓地域最古の前方後方墳である元稲荷古墳の西側くびれ部の調査が実施され、墳丘下部の古墳の築造工程が判明した。築成直前の地表土を除去し、硬く締まった土壌を敷き詰めるという基礎地業の存在、及び墳丘盛土施行の構築手法が判明



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。



するなど、古墳築造の施工過程の詳細が判明する貴重な成果が得られた。宮跡第480次調査(向日市鶏冠井町)では、長岡京期の石敷が検出された。宮跡第481次調査(向日市向日町)では、第二次内裏を長岡宮朝堂院中軸を挟んで西側に折り返した地点で、外郭を回廊で囲んだ区画が見つかり話題を呼んだ。回廊は内外に石組みによる溝を伴い、24基確認された柱列の配列から、複廊であることが判明した。柱は全て掘立柱形式で、平城宮内裏内郭や後期難波宮内裏と同じ構造であった。史料にみえる第一次内裏(西宮)の北西角を限る施設の可能性が指摘され大きく報道された。

**左京域** 左京第539次(向日市鶏冠井町)では、一条大路の南側溝及びこれに南面する宅地内で内溝(築地雨落ち溝)が検出された。側溝は幅2.5～3mと幅広く、長岡京期における浚渫の段階で、人頭大の巨礫を据えた土橋状の張り出しが形成され、一町宅地中央に開かれた門前の架橋基礎と考えられた。左京第540次(京都市伏見区)では、長岡京期～中世の東西溝が検出された。

**右京域** 右京第1001次調査(長岡京市勝竜寺)では、恵解山古墳第11次調査として、前方部東辺の墳丘下部の調査が実施された。最下段の墳丘が軟弱地盤の上に盛り土によって形成されていることが明らかになるとともに、墳丘斜面の葺石の区画石列による施工手順が確認された。右京第1011・1012次調査(長岡京市長岡)では、長岡京期とそれに先行する掘立柱柱穴が検出された。右京第1013次(長岡京市長岡)の調査によると、四条大路推定線のやや南で長岡京期の遺物を多量に出土する東西溝(宅地内溝)が検出され、弥生～古墳時代の遺物も出土した。縄文時代晩期の集落として知られた上里遺跡の南方への広がりを探る目的で、右京第1014次(長岡京市井ノ内)が実施された。試掘の結果、各所で長岡京期の遺物包含層を認め、開析谷地形を挟んでその南北両側でそれに先行する生活面(弥生時代)及び縄文時代の包含層の存在が明らかとなった。右京第1016次(長岡京市下海印寺)では、奈良時代の土器類やフイゴの羽口・炉壁片などが出土し、近在する<sup>ともおか</sup>鞆岡廃寺との関連で捉えることができる成果を得た。下海印寺遺跡内の右京第1017次調査(長岡京市下海印寺)では、古墳時代後期の竪穴式住居跡及び土坑が検出された。

**京域外** 南条遺跡第7次調査(向日市物集女町)では、古墳時代中期後半築造の直径28mの円墳である南条3号墳の西側での調査が実施され、西縁を限る周濠の内傾斜面上の肩を確認した。合わせて、竹やぶ客土中から鉄刀1振が出土した。古墳時代前期の前方後円墳である鳥居前古墳第5次調査(大山崎町円明寺)では、墳丘の外縁部各所に調査区を設けて、その構造や規模に関する資料を得た。京都盆地側(東側)に限り存在する最下段(付加壇)は、盛土により築成され、埴輪列と葺石による外部施設を施すが、これが前方部前面に回り込む確証は得られなかった。また、付加壇を有しない西辺は、当初の復原位置よりも墳丘主軸に近づいて、前方部幅が狭くなることが分かった。くびれ部周辺から家形・蓋形などの形象埴輪が出土した。勝持寺旧境内遺跡(京都市西京区)では、中世山岳寺院に関する考古学的な新知見が得られた。「勝持寺四十九坊」と称する子院が丘陵部を雛壇状に造成して形成されている一画の調査が実施され、15世紀後半の、子院(寛永の絵図中にある「阿弥陀坊」「正行坊」)の境界を限る区画施設(石垣・石塁・土塀)、子院内の礎石建物、階段状の石段列などが検出された。石塁は小振りの石材を築垣状に積み上げた構造を呈し(現状で高さ0.8m)、文献にみえる「石築地」<sup>いしつちぢ</sup>の考古実例として注目された。(伊賀高弘)

## 普及啓発事業（11月～2月）

---

当調査研究センターは、京都府内で国や府等が行う公共事業により消滅する埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくために、発掘調査現地説明会・埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業(体験学習)等の普及啓発活動を行っています。今期の事業では、「関西・考古学の日」にちなむ考古学講座と現地説明会の実施状況について報告します。また、創立30周年記念事業として普及啓発誌『天平びとの華と祈り—謎の神雄寺』を12月に刊行しました。

---

### 「遺物に学ぶ」考古学講座

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿地区の法人が中心となり10月の第二土曜日を「関西・考古学の日」と銘打って、9月から11月の3か月間、各組織で各種イベント等を開催しています。当調査研究センターではこの間、計8回の考古学講座「遺物に学ぶ」を開催し、11月以降は3回の講座を行いました。第6回の講座では、『海をわたる縄文丸木舟』と題して、丸木舟をとおしてみた縄文の地域間交流を石井清司主幹が解説し、第7回の講座は、『土器が移動するって、どういうこと?』と題して、古墳が出現する頃の土器の移動を高野陽子調査員が講義しました。第8回の講座は、『農耕のはじまりと道具のうつりかわり』と題して、肥後弘幸調査第1・2課長が農耕文化の定着と使用された道具について報告しました。この事業の総括については、別項に掲載しています。

### 現地説明会

平成22年度事業も終盤期に入り、調査成果の公開を目的として現地説明会を10遺跡で開催しました。

木津川市椿井遺跡は、縄文時代から中世にかけて断続的に営まれた集落遺跡です。三角縁神獣鏡の出土で知られる椿井大塚山古墳の南方約600mの地点で、6世紀初頭に築かれた古墳2基を検出しました。山城地域の横穴式石室の導入期を考える上で貴重な資料となりました。11月21日に説明会を開催し、145名の方に参加いただきました。

南丹市野条遺跡は、亀岡盆地北部の大堰川左岸の平野部に位置する集落遺跡です。これまでに16次に亘って調査が実施され、弥生時代、奈良・平安時代、中世の遺構・遺物が多数確認されています。今回の調査では弥生時代後期に灌漑用水などに用いられたとみられる集落の南西部を限る溝を検出しました。11月23日に現地説明会を行い、47名の方々に見学いただきました。

八幡市柿谷古墳は、竹藪の中に高さ2mほどの墳丘の一部が残されていました。調査の結果、6世紀中頃に築かれた一辺約12mの方墳であることが判明し、木棺を直葬する埋葬施設内から馬具の轡や鉄地金銅張の胡籙(矢筒)などが出土しました。12月23日に現地説明会を行い、73名の方々



上狛北遺跡現地説明会



椋ノ木遺跡現地説明会

に参加していただきました。

京丹波町塩谷南古墳群は、京都縦貫道丹波綾部道路建設による樹木伐採時に確認された古墳群です。巫女形埴輪が出土した塩谷古墳の南東100mに位置し、6世紀初頭に築かれた直径約12mの円墳1基を調査し、木棺を納めた2基の埋葬施設を検出しました。1月15日に53名の参加者を得て説明会を開催しました。

京都第二外環状道路建設に伴う長岡京跡右京第1007次・下海印寺遺跡の調査では、平安時代後期の有力者の屋敷跡を検出しました。一辺約50m、幅約5mの溝が方形にめぐり、その内側は建物跡や柵が計画的に配置されていました。1月22日に開催し、118名の方々に参加いただきました。

精華町下馬遺跡では、奈良時代後期から平安時代後期にかけての掘立柱建物跡や柵列・井戸などを多数検出しました。遺跡地の東には官道が推定され、公の施設が隣接していたのかわ

りません。1月23日に現地説明会を行い、127名の方々に参加いただきました。

木津川市上狛北遺跡では、幅約1mの溝が南北方向に約100mにわたって一直線に伸び、奈良時代中期の土器類とともに、恭仁宮などで使用された軒平瓦が出土しました。恭仁宮の幻の「京城」造営に伴う施設かと、大きく報道されたことにより、1月23日の現地説明会には481名の方々に参加いただきました。

精華町椋ノ木遺跡は、木津川左岸の自然堤防上に営まれた縄文時代から中世にいたる集落遺跡です。今回の調査では、平安・鎌倉時代の遺構の下層から古墳時代中期の円墳4基を検出しました。遺跡の南側で確認した同時期の集落の居住域と墓域が想定されます。2月5日に現地説明会を行い、143名の方々に参加いただきました。

長岡京跡右京第1008次・松田遺跡では、奈良時代後期から平安時代前期の溝などとともに、古墳時代初頭から後期にかけての竪穴式住居跡や溝などを検出しました。古墳時代の遺構は周辺の調査でも多数検出されており、大規模な集落跡の存在をうかがわせる貴重な成果が得られました。2月26日に現地説明会を行い、65名の方々に参加いただきました。

南丹市園部城跡は、江戸時代初頭に小出吉親により築かれた城跡で、幕末時には御所警護のため大規模な改修が行われています。今回の調査では、絵図に描かれていなかった改修以前の堀跡を確認しました。2月26日に現地説明会を行い、56名の方々に参加いただきました。(水谷壽克)

## 「関西・考古学の日」関連事業を振り返って

小池 寛

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックでは、考古学や発掘調査をもっと身近に感じていただくために、加盟する11法人が協調し、実行委員会を立ち上げたのが今から3年前のことである。この3年間、9月から11月の3か月にわたって、法人ごとに講演会や展示会、体験発掘、遺跡見学会などの多彩なイベントを繰り広げている。また、10月第2週の土曜日を「関西・考古学の日」と設定して、今年度は統一の記念講演会を滋賀県において実施した。

今年度、当調査研究センターでは設立30周年の節目を迎えることから、『天平浪漫紀行・京都』と題して向日市文化資料館において展示会を開催した。また、向日市民会館において同じタイトルで記念講演会を開催した。これらのイベントを広く知っていただくために、関西考古学の日のパンフレットにイベント情報を掲載し、展示会会場をスタンプラリーの一会場とした。

当調査研究センターでは、『「遺物に学ぶ」考古学講座』をその一環として研修室で開催した。講師は、職員が担当し、日ごろから温めているテーマについて熱く講演した。大きな会場で行う講演会とは異なり、話し手と聞き手が意思の疎通をはかりながらすすめる講座は、われわれの啓発活動に対する意識をも変えてくれた。

今回の考古学講座では、縄文時代から近世までを対象に8回の講座を開催した。詳しくは別表に掲載しているが、縄文時代の丸木舟やドングリ食のはなし、農耕のはじまりによる道具のうつりかわりや木器文化のはなし、古墳時代における国内での土器の移動と朝鮮半島からもたらされた陶質土器のはなし、そして、桃山陶器から近世陶磁器のはなしなど多岐に及んだ。また、各講座では、関連する遺物やパネルを実際に展示することで、臨場感あふれる講座づくりに努めた。その結果、参加していただいた方々からも大変わかりやすかったと好評を得ることができた。

延べ137名の熱心な方々の参加は、われわれに外部に向けての情報発信の重要性とさらなる工夫の必要性を認識させてくれた。来年度からも異なった切り口で積極的に取り組んでいきたいと思う。

付表 平成22年関西・考古学の日 発表者等一覧

| 回数  | 開催日    | 講師   | テーマ                                       |
|-----|--------|------|---|
| 第1回 | 9月18日  | 伊野近富 | 『桃山陶器の世界』・桃山陶器の見かたや系譜、そして、美を語る・・・         |
| 第2回 | 9月25日  | 小池 寛 | 『朝鮮半島からきた陶質土器』・京都のなかの陶質土器出土の意味・・・         |
| 第3回 | 10月 2日 | 増田孝彦 | 『縄文時代の主食、ドングリを語る』・ドングリ文化とその深層・・・          |
| 第4回 | 10月16日 | 引原茂治 | 『近世陶磁器は語る』・身近な江戸時代の食器・茶器の世界を語る・・・         |
| 第5回 | 10月23日 | 戸原和人 | 『木器からみた古代の生活復元』・鉄、石、土だけじゃ復元できない古代の生活！・・・  |
| 第6回 | 11月 6日 | 石井清司 | 『海をわたる縄文丸木舟』・丸木舟をとおしてみた縄文の地域間交流・・・        |
| 第7回 | 11月13日 | 高野陽子 | 『古墳が出現する頃の土器をめぐる交流』・古墳が出現する頃の土器の移動を考える・・・ |
| 第8回 | 11月20日 | 肥後弘幸 | 『農耕のはじまりと道具のうつりかわり』・農耕文化の定着と道具のうつりかわり・・・  |

## センターの動向

(平成22年11月～平成23年2月)

| 月日    | 事   | 項 |
|-------|---|---|
| 11 1  | 下馬遺跡(精華町)発掘調査開始   |   |
| 6     | 「遺物に学ぶ」考古学講座第6回『海をわたる縄文丸木舟』講師；石井清司調査第2課主幹(参加者17名)   |   |
| 10    | 長岡京跡右京第1006次調査(長岡京市)発掘調査終了(7/23～)   |   |
| 11    | 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：徳島県)肥後弘幸調査第1・2課長、今村正寿総務課主任、須田千春主事参加(～12)  |   |
|       | 「長岡京発見ノ地」石碑建立記念式典(於：長岡京市)小池久常務理事・事務局長出席   |   |
|       | 人権大学講座(於：京都市)筒井崇史調査第2課調査員受講   |   |
| 13    | 「遺物に学ぶ」考古学講座第7回『土器が移動するって、どういうこと?』講師；高野陽子調査第2課調査員(参加者23名)   |   |
| 15    | 人権大学講座(於：京都市)小池寛調査第2課課長補佐受講   |   |
| 16・17 | 京丹後市史編さん資料調査(於：京丹後市)肥後弘幸調査第1・2課長派遣  |   |
| 17    | 鳥取橋遺跡第2次(京丹後市)発掘調査開始  |   |
| 20    | 「遺物に学ぶ」考古学講座第8回『農耕のはじまりと道具のうつりかわり』講師；肥後弘幸調査第1・2課長(参加者13名)   |   |
| 21    | 椿井遺跡(木津川市)現地説明会(参加者145名)・発掘調査終了(8/10～)  |   |
| 23    | 野条遺跡(南丹市)現地説明会(参加者47名)  |   |
| 24    | 長岡京連絡協議会(於：当センター)<br>緊急雇用対策事業「出土品整理」業務開始  |   |
| 26    | 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック埋蔵文化財研修会(向日市民会館)肥後弘幸調査第1・2課長、石井清司調査第2課主幹、小池寛調査第2課課長補佐、岩松保資料係長、伊野近富次席総括調査員、中川和哉主任調査員、高野陽子・奈良康正・村田和弘・松尾史子・古川匠調査第2課調査員出席 |   |
| 27    | 宇治市民大学(於：宇治市)小池寛調査第2課課長補佐講師派遣   |   |
| 12 2  | 第2回全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於：東京都)小池久常務理事・事務局長、安田正人事務局副局長参加  |   |
| 3     | 野条遺跡(南丹市)発掘調査終了(7/5～)   |   |
| 7     | 都出比呂志理事 柿谷古墳・塩谷南古墳群現地視察   |   |
| 8     | 平成22年度第2回人権教育(教育局別)行政担当者等研究協議会肥後弘幸調査第1・2課長参加  |   |

- 加塚遺跡(亀岡市)発掘調査開始
- 9 二府一県会議(於：当センター) 肥後弘幸調査第1・2課長、小池寛調査第2課課長補佐、岩松保資料係長、中川和哉主任調査員、筒井崇史調査員出席
- 14 中尾芳治副理事長 松田遺跡・下海印寺遺跡現地視察
- 15 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 17 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：八尾市) 岩松保資料係長出席  
教育庁職員行政・人権問題研修(於：ルビノ京都堀川) 水谷壽克調査第1課主幹、石井清司調査第2課主幹、伊野近富次席総括調査員、伊賀高弘主査調査員、高野陽子・奈良康正・筒井崇史・松尾史子調査員、今村正寿総務課主任、鍋田幸世主事、小山雅人副主査出席
- 20 第92回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川) 上田正昭理事長、小池久常務理事・事務局長、石野博信・井上満郎・都出比呂志・中谷雅治・増田富士雄・川村智各理事、清水浩平監事出席
- 21 鳥取橋遺跡第2次(京丹後市)発掘調査終了(11/17～)
- 23 柿谷古墳(八幡市)現地説明会(参加者73名)
- 24 教育庁職員行政・人権問題研修(於：ルビノ京都堀川) 岩松保資料係長、杉江昌乃総務係長、戸原和人・中川和哉主任調査員、石尾政信・黒坪一樹・岡崎研一専門調査員、村田和弘・古川匠調査員、須田千春総務課主事出席
- 1 11 史跡教王護国寺境内(東寺東大門)発掘調査開始
- 13 柿谷古墳・美濃山遺跡(八幡市)発掘調査終了(7/26～)
- 15 塩谷南古墳群(京丹波町)現地説明会(参加者53名)
- 18 中尾芳治副理事長・中谷雅治理事 上狛北遺跡・棕ノ木遺跡現地視察  
加塚遺跡(亀岡市)発掘調査終了(12/8～)
- 20 岡村道雄文化庁調査官 伊賀寺遺跡出土遺物視察  
塩谷南古墳群(京丹波町)発掘調査終了(10/18～)
- 20～21 監査委員事務局による監査
- 22 長岡京跡右京第1007次・下海印寺遺跡(長岡京市)現地説明会(参加者118名)
- 23 下馬遺跡(精華町)現地説明会(参加者127名)  
上狛北遺跡(木津川市)現地説明会(参加者481名)
- 25 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(於：大阪府) 安田正人事務局副局長、杉江昌乃総務係長、今村正寿総務課主任出席
- 26 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 28 下馬遺跡(精華町)発掘調査終了(11/1～)  
史跡教王護国寺境内(東寺東大門)発掘調査終了(1/11～)
- 2 3 長岡京跡右京第1007次・下海印寺遺跡(長岡京市)発掘調査終了(9/2～)

東京都埋蔵文化財センター常務理事 当センター施設等視察

木津川市河井規子市長 上狛北遺跡現地視察

- 5 棕ノ木遺跡(精華町)現地説明会(参加者143名)
- 8～9 埋蔵文化財担当職員等講習会(於：埼玉県) 高野陽子調査員参加
- 10 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：当センター) 小池久常務理事・事務局長、肥後弘幸調査第1・2課長、小池寛調査第2課課長補佐、岩松保資料係長出席
- 12 当センター職員(技術職員)採用選考試験(第一次)
- 16 精華町立精北小学校第3学年63名 棕ノ木遺跡見学  
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於：長岡京市) 小池久常務理事・事務局長、安田正人副局長出席
- 18 精華町立精北小学校第6学年60名 棕ノ木遺跡見学
- 20 当センター職員(技術職員)採用選考試験(第二次)
- 23 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 25 緊急雇用対策事業「出土品整理」業務終了
- 26 松田遺跡(大山崎町)現地説明会(参加者65名)  
園部城跡(南丹市)現地説明会(参加者56名)



2月16・18日 精華町立精北小学校児童による棕ノ木遺跡の見学風景

## 編集後記

情報第 114 号をお届けします。

「『関西・考古学の日』関連事業を振り返って」の報告にあるように、全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックの加盟法人では、10月第2週の土曜日を「関西・考古学の日」として、その前後9～11月にはイベントを集中的に行っております。当調査研究センターでも「遺物に学ぶ考古学講座」と銘打って、8回の講座を行いました。

来年度も趣向を変えて実施する予定です。多くの方々の参加をお待ちしております。

(編集担当 岩松)

## 京都府埋蔵文化財情報 第114号

平成 23 年 3 月 30 日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141





KYOTO  
ARCHAEOLOGY CENTER